
知らない千冬がいる世界

ネコ削ぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

知らない千冬がいる世界

【Nコード】

N8076W

【作者名】

ネコ削ぎ

【あらすじ】

織斑千冬になってから様々な事があるな。友人が世界を変えたり、弟が男で唯一ISを扱えたりと。私自身ブリュンヒルデなんて呼ばれている。まったく、平穩が無いな。

ISの始まりだ（前書き）

すみません、現在もの凄い勢いで迷子になっている、ネコ削ぎです。
なんかもう、なーんにも考えてないかも。
では、そんなやる気の無いだらけた作品をどうぞ。

ISの始まりだ

今日は良い天気だな。

雲1つ無い青い空にぽつんと浮かびながら思う。

まもなく良い天気がガラリと変わるのだが。外干している方は心配しなくて良い。雨が降るわけでは無いのだから。
では、何が降るのか？

「ちーちゃん、そろそろ来るよ。全力でバンバン落としちゃってね」

私の元に友人から気楽な通信が来る。

あまりに緊張感が無い声を聞くとため息が出てしまう。

私達がこれから行うことは世界に絶望と希望を与える大事なのだが、首謀者が理解しているのかしていないのか？

もし、理解していないなら間が抜けている。理解しているなら、もう少し罪悪感を持ってもらいたい。

「見えてしまったか」

遠い向こうの空から幾つもの点が見える。

ハイパーセンサーが作動して私に点の群れが何なのかを教えてくれる。

強化された視力が点の正体をミサイル群だと見破る。
認識するとすぐさまブレードを構える。

「これがゲームの類いなら気楽にやれるのだがな」

そう愚痴りたくなるほどの数のミサイル。

一撃離脱を基本にどこまでいけるか？

目を閉じて深呼吸を2回する。精神を安定させてから目を開けて集中する。

「ハアアア！！」

全てとは言わないが、ほぼ撃墜させてもらおう！！

一番始めに私の射程内に飛び込んできたミサイルを切り裂き、すぐに次のミサイルに向かう。

出来る限り誘爆させて数を減らしていく。

時にはミサイルを蹴って加速して次を破壊する。

対応が間に合わず、何度かミサイルに激突したのだが、バリアーのおかげでダメージ自体はほとんど無い。しかし、ミサイルが命中して平気でいられるほど私は図太くない。心臓は早鐘を打つ。同時に言葉に表せられない高揚感が私をミサイル群に突撃させる。

これが私、織斑千冬と篠ノ之束の起こした白騎士事件の始まりだった。

馬鹿ばかりだな、このクラスは（前書き）

話に繋がりが無いかも

馬鹿ばかりだな、このクラスは

「まったくお前は。もう少しだけ中身のある自己紹介は出来ないのか？」

一年一組の教室に入ると教卓に背を向けて挨拶をしている我が弟の一夏がいたので注意をする。

「ち、千冬ねえ！？」

私の注意を聞いて振り向いた一夏。

……そこまで驚く必要は無いだろう。

「この場では織斑先生だ。良いな、分かったか？」

あまり公私混同してはいけないからな。

「あ、ああ」

「返事は『はい』だ」

まったく、初めての学校では無いはずだぞ。

「私がこれから短い間で君達を使い物にするために様々な事を教える織斑千冬だ。先のやり取りで分かるかも知れないが、此処にいる織斑一夏の姉だ」

しーんとした謎の間。そして沈黙を破るようにクラス中から黄色い声があがる。

「「「「「キヤー！！」「」「」」

「本物の千冬様よ！！」

本物で悪いか？

「お姉様って呼ばせてください！！」

私は弟で手一杯だから、他をあたれ。

「お父さんお母さん、産んでくれてありがとうと今言いたい！！」

それは然るべきタイミングで面と向かって言うべきだろ。

「私のクラスは毎年馬鹿ばかり集まるな。いい加減作為的なモノを感じる」

キヤーっとさらなる盛り上がりを見せたクラスに私は呆れ半分諦め半分の状態だ。

「山田先生、ご苦労」

私が来るまでの間、馬鹿者達を相手していてくれて。

「い、いえ。仕事でしたから」

顔を赤らめて言う山田先生。

……君もか。

もはや溜め息しか出ない。

「これから君達にISの基本動作や理論を叩き込んでいく。私への返事は『はい』か『分かりました』だ」

私が何かを喋る度にクラスから黄色い声があがる。

だから私は出席簿持って手近でやかましい生徒の方へ行く。
瞬時に出席簿を振り上げ少々力を込めて降り下ろす。

パン！！

「い！？」

叩かれた箇所を押さえながら痛みに悶える生徒。
その光景を見たその他はピタリと止まった。

「私の言うことは黙って聞け。良いな？」

クラス中が必死に頷き始めた。
少しだけやり過ぎたか？ いや、ちょうど良いな。

前途多難だな、このクラスは

私が織斑千冬になって結構経った。

おかしな言い方だな。だけど私にはこの言い方が一番しっくりくる。こつ、自分が何か違う気がしたのだ。昔の話だから今はそんなこと無い。

私が織斑一夏の姉になってから結構経ったのだが……何故一夏は拳動不審なんだ？時折隣の生徒を見ているようだし。

「織斑くん、何か分からないところはありますか？」

やはり山田先生も気になったか。あまりに不審すぎる。教科書を開いてはいるが、その後からめくる動作が無い。

「先生！！」

意を決したのか、声を張り上げる一夏。はつきりと分かる。一夏が何を言うのか。

「ほとんど全部分かりません」

……当たるものだな。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

読んで分からないなら少しだけ許そう。読んでいなかった場合は……叩く。

「古い電話帳と間違えて捨てました」

「……そうか」

パン！

「必ず読めと書いてあったと思うが……読んで無いなら分からないか」

捨てる物の確認くらいしてほしいものだな。

「はあ、あとで再発行してやるから1週間以内に覚えろ」

あの参考書は再発行が大変で値段が高くつくのだからな。
溜め息が出てしまう。

「1週間であの分厚いのは……」

「自業自得だ。お前の周りにいるのは、お前の言う古い電話帳にせつせと目を通して覚えてきたんだ。ならば、お前も頑張つてやれ」
心を鬼にして言う。覚えなければ置いてきぼりをくらって惨めな思いをするだけだから。

「ISのスペックは現存する兵器を凌駕している。凌駕しているが故に知識の無い者が扱えば大惨事を招く可能性がある。お前の言う古い電話帳はその危険を無くすための知識が書いてあるんだ。これからISを扱う訓練もあるのだから、1週間で覚えるくらいの熱意を見せろ」

一夏はどこか腑に落ちない様子だ。

「お前は自分が望んで此処にいるわけではないと思っているな」

一夏、せめてポーカーフフェイスを覚えろ。考えが駄々漏れだぞ。

「望んでいようがいまいが、人が集団から離れて生きていくことは出来ない。だから受け入れろ」

決心を固めたのか、やる気が感じられるようになった。

「織斑くん、分からないことがあったら放課後教えてあげますから」

山田先生が一夏の手を握って救いの手を無理矢理とらしている。

「じゃあ、放課後おねがいします」

チラッと私を見てから頼む一夏。

「教師と生徒が放課後に2人きり。……駄目ですよ、織斑くん。私、まだ男の——」

パン！！

「山田先生、そろそろ授業の続きを」

「は、はい！！」

山田先生を強制的に覚醒させて授業の再開を促す。

「織斑も座れ」

「はい!!」

このクラスの生徒達と山田先生は私には荷が重いな。

話を聞かない奴が居るな、このクラスには

3時間目が始まり、私は教壇に立って教室を見渡す。

「それでは授業を開始——」

そういえばクラス代表を決めなくてはならないな。

「する前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表者を決める」

一夏は明らか分かっていないな。

「クラス代表はクラス長のことだ。で、クラス対抗戦は入学時点の各クラスの実力を測るものだ。一度決まると1年間変更出来ないからな」

はつきり言えば誰でも構わない。別にクラスが勝ってもボーナスが貰える訳ではないからな。

ところで一夏。関係無いみたいに思っているかも知れないが、お前が一番祭り上げられる可能性があるぞ。

「はい！！織斑くんを推薦します」

「私です」

やはりな。……一夏は自分のことだと気がついていないのか？

「候補者は織斑一夏。他にいるか？自薦他薦は問わない」

昔から厄介事は押し付け合いが当たり前だな。自薦する物好きなど居るわけないか。

「俺!？」

「織斑、席につけ」

「俺はやるなんて言っていないぞ」

「分かったから座れ」

一夏を座らせる。落ち着け、時間は有限なんだ。

「言い忘れたが、他薦された者に拒否権は無い」

「あれ?分かったって聞いたんだけど」

気にするな、一夏。私はお前の言い分を聞いたただけだ。

「納得がいきませんわ」

立ち上がるセシリア・オルコットと言う生徒。

一夏と言ひ貴様と言ひ、今は授業中なのだがな。

「座れ、オルコット」

「そのような選出は認められませんわ。実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然」

なら自ら手を挙げる。

「二度目だ。座れ、オルコット」

「良いですか？クラス代表は実力トップがなるべき。つまりわたくしですわ。極東の猿にされては困ります」

無視か、オルコット？

「これが最後の警告だ、オルコット。いい加減に座れ」

「大体、文化としても後進的な国で——」

そうか、警告を聞き入れないのかオルコット？ならば然るべき手段を持ってやらせてもらう。

「おおお織斑先生、落ち着いてください！？」

出席簿を片手に持つ。

山田先生が私を止めようと抱きついてくるが、私には関係無いな。

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ」

一夏、お前も私を怒らせたいのだな。

「決闘ですわ！！」

「おう、いいぜ！！」

楽しそうだな、2人共。出席簿が粉々になるまで叩いてやろう。あ

りがたく思うが良い。

「駄目ですよ、織斑先生！？絶対に絶対に絶対に駄目ですよ！？」

山田先生が私を止めようと必死になっているのを見て、私は自らを止める。山田先生に迷惑をかけてまで、馬鹿2人を叩きたいとは思わないからな。

「さて、話はまとまったな。では、織斑にオルコット。重要な物を渡すから此方に来い」

睨み合いながら、私の前に来る2人。

「よく来たな」

パン！！パン！！パン！！パン！！

オルコットは3回、一夏には1回出席簿を振り下ろす。

「これからは私の言うことに耳を傾ける。良いな、特にオルコット」

少しだけスッキリしたと言っておこうか。

無自覚でよくもやるな、山田先生

放課後になり、私は1年1組の教室に向かう。

途中まで書類を片手に持った山田先生が居たのだが、何か悩む仕事をした後、焦った表情で何処かに走っていった。

何処かと言うが、行き先は私と同じだ。

用件は一夏の暮らす部屋についてだ。

まあ、山田先生が一夏を足止めしていることを祈りながら、ゆるりと行くでしょう。

教室に着いた時に視界に入ったのは肌が触れ合うくらいの距離で話をしている一夏と山田先生。

君は時折無自覚ながら大胆だな、山田先生。

「あ、荷物なら」

フム、部屋についての説明は終わったのか。

「私が手配しておいた」

何故か驚いているな、一夏。

「千冬ねえ」

「織斑先生だ」

お前は聞いた事をすぐに忘れるのか？姉として心配になるぞ。

「手配したが、生活必需品と着替え、携帯電話の充電器くらいだ。他に必要な物があれば、手間かも知れないが休日に自宅から持つてこい」

一夏が何を必要としてるか分からないのに、当てずっぽうで持つていつて要らない物だったら迷惑になるからな。一夏には悪いが自分でなんとかしてもらう。

「大浴場がありますが、織斑くんは今のところ使えません。部屋についているシャワーで我慢してください」

「え、なんでですか？」

……少しは考えろ。

「はあ、同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？まあ、お前も男だからな。少しくらいはそう言う考えもあるだろう」

「織斑くん、女子とお風呂に入りたいんですか！？」

「いや、入りたくないです」

必死だな、一夏。

「女の子に興味がないんですか！？それはそれで問題のような」

極論を展開して話を誤解を招く過激な発言をするな、山田先生。……私からしてみれば君の考えの方が問題だ。

ところで山田先生。君の軽はずみな発言で私の弟が酷い誤解を受け

ているのだが。

「それじゃあ私達は会議があるので」

見事に場を荒らすだけ荒らしていったな。
私も行くかな。

「山田先生」

1年1組からだいぶ離れた廊下で山田先生に声をかける。

「はい。何ですか織斑先生」

嬉しそうに振り向いたな。

だから、山田先生の頭に右手をポンと置く。

君が今何を思っているかは知らないが、残念なお知らせだ。

「もう少し自身の発言について考え欲しいのだが」

アイアンクロード!!

「痛い、いいいい痛いです!!」

大丈夫だ、私は痛くない。

口はわざわざいのもとと言うが本当だな

あからさまにぐったりしているな、一夏は。

まだ2日目の授業だというのに大変だな。

学校の授業と言うものは集団で行われるものだから、躰いた者などに構うことは基本的に無い。たとえ山田先生であっても。

山田先生は多少詰まる部分もあるが授業を進めている。

一夏は分からないなりに頑張って教科書を読んでいる。

まあ、頑張れよ。

「なんか体の中をいじられてるみたいで怖いんですけど」

授業内容で気になることがあったのだろう。女子生徒が質問してきた。

「難しく考えなくていいですよ。例えばブラジャーですね。あれはサポートしてくれます。人体に悪影響はありません。ですが自分にあった物を……」

山田先生は一夏と目が合うと停止してしまった。

その例えはあまりおすすめできないな。

「居たんですか、織斑くん!？」

私の記憶では、最初から今まで一度も居なかった事はなかったが。

「えっと、その、織斑くんはしていないから分かりませんね。あはは……」

あー、なんだろうな？一夏よりも周りの女子達の方が意識しているのだが。

授業もストップしてしまったな。……主に山田先生が原因で。これは、私がなんとかしなければならぬのだろうな。

「山田先生、授業の続きを」

少々力を込めて山田先生に授業再開を呼び掛ける。

「は、はい!？」

私の言った事を一瞬理解してなかったな、あの返事は。まあ良い。授業が動き出したのだから。

「ISは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

「先生、それって彼氏彼女のような感じですか？」

ああ、お前がそれで良いなら良いと思うぞ。

「そ、それは……その……どうでしょう？私には経験がないので分かりませんが」

はあ、軽くないなして授業を進めて欲しいところなのだが。

赤面するな山田先生。雑談を始めるな女子共。

……一夏、私の方を向くな。あと少して授業が終了するから我慢し

る。私も止める気力が無い。

チャイムが鳴るまでの間、目を閉じて待つ。

……何故だか山田先生が居ると思われる場所から熱っぽい視線を感じるのは？

ぱちつと目を開けると山田先生が顔を逸らすのが同じだった。

たまに授業が早く終わってほしいと思う私がいるのだが。

あの酷い授業の後のわずかな休みがとてもありがたい。欲張るようだが、もう少しだけ休みたい。

1年1組の教室に入る時、不覚にもそう思ってしまったな。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの」

一夏の周りに女子の集団が居るな。

私はお前の姉になった覚えは無い。

「え？ 案外やさ」

「休み時間は終わりだ」

だから、とつとと散れ。

一夏の周りに居た集団はすぐさま席に着いた。何名か違うクラスの奴が居たが。

「そついえば織斑、お前のISは準備まで時間がかかる」

「へ!？」

「予備が無い。だから学園で専用機を用意するようだから、ゆるりと待て」

ここまで言っただけだが、一夏は明らかに理解していないな。周り
はざわついているのに。

……なんとなく良いから分からないのか？

「はあ。教科書6ページを音読しろ」

一夏に音読させている間、目を閉じて暫し休む。

……最近ため息の回数が増えてきたな。

「——禁止されています」

終わったか。

「読んだ通りだ。理解したか？」

「な、なんとなく」

なんとなく……か。まあ、少しは理解したのだな。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

女子の1人が質問してきたな。

さて、言つべきか言わないべきか。……どこかで明らかになるからばらしても構わないな。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

私としては初日の自己紹介でばれると思つたのだがな。
淡々と言つたのだが、周りは盛り上がってしまった。

「このクラス、有名人の身内が2人もいる!!」

そうだな。あくまで身内だがな。

「篠ノ之博士つてどんな人!? やっぱ天才なの!？」

天才だから、指名手配されていながらも捕まっていななんだ。

「篠ノ之さんも天才だったりする!？」

そのような事は言つな。

「あの人は関係ない!!」

篤が声を張り上げて否定した。

それで思い出したのだが、今は授業中なのだ。

「いい加減授業を始める。山田先生、号令を」

私がこの騒動を巻き起こしたのだが気にしない方向で行こうか。

眼中に無いとはこの事か

クラス代表を決める対決の日になった。

私は不安に思うことがある。

あのオルコットが宣戦布告してから1週間経過したのだが、どのアリーナでも一夏が練習している姿がなかった。山田先生に確認したところ、打鉄の貸出申請すらなかった。

やる気が無いのか、諦めたのか？

前者だろうが後者だろう、そんな理由なら小遣いは無しだ。

もしも、私が知らないところで絶え間ない努力をしているのであれば……まずは褒めよう。

……気がついたら先ほどまで私の前を歩いていた山田先生が遠くの方にぼつんと見える。

まあ良い。私はゆるりに行くか。

第3アリーナのAピットにたどり着くと、呼吸を止めて顔を赤くした山田先生とたぶん山田先生をそそのかした一夏と2人のやり取りを睨み付けている筈が居た。

……とりあえず山田先生はそのまま置いてほしい。場を異常に乱すからな。

「ふはあ！！まだですか！？」

……君がなんで教師になったのかとても気になる。

「はあ、こんなんだが一応目上の人間だ。少しは敬意を払え」

視界の端に涙目の山田先生が映るが無視する。

「……千冬ねえ」

「織斑先生だ。次間違えたら叩くからな」

私の言葉にホツとした様子の一夏。

「ところで、来ました。織斑くんの専用IS!!」

謎の復活を遂げた山田先生がはしやぎながら一夏に言う。

「すまないが、ぶつつけ本番でものにしろ」

アリーナの使用時間が限られているからな。時間は無限じゃないんだ。

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ」

軽く乗り越えてみせろとは、難しい事を軽く言うな、等。だったらお前が代わりに挑戦するか？

「は？あ？え？」

3人がかりで言い過ぎたな。

「早く」

「気にするな。ゆるりとやれ」

現れたのは白いIS。白以外の色など無い純白。

「これが織斑くんのIS『白式』です!!」

山田先生が嬉しそうに語るが、一夏は唯それを見つめているだけだ。

仕方ない。

一夏の額を軽く小突いて意識を戻す。

「兎に角体を動かせ。すぐに装着しろ。フォーマットとフィッティングは試合の最中でやれ」

私の言葉を聞くと一夏はISに触れる。

一夏がISに体を預けると装甲が閉じて一体化する。

「ハイパーセンサーは問題無いな。気分は悪く無いな、一夏?」

「大丈夫、千冬ねえ。いける」

とうとう一夏がISを手にしてしまったな。

「千冬ねえ」

目を閉じて考え事をしていると、一夏が話しかけてきた。

「どうした？」

目を開けると真剣な眼差しをした一夏が映った。

「行ってくる」

「そうか、行ってこい」

そのやり取りを終えると一夏はゲートに進んで行き飛び立った。

「私には何も無いのか！？」

……はあ。日頃の暴力が原因だと思っただがな、箒。

空気を読め、そして察しろ

一夏のオルコットの試合は……まあ、予想通りの結果だったな。

オルコットの懷まで入り込んだまでは良かったが、雪片の力を理解していなかった事が原因で一夏の敗北になった。

もし、一夏が雪片の特殊能力を理解していたの戦いだったなら勝利していただろう。

……話は変わるが、目の前にあからさまに落ち込んでいる一夏が居るのだが。さすがの箒もどうすれば良いか分からないようだ。私や山田先生をチラチラ見ている。

私も山田先生の方を見ると山田先生は何かを言わなければならないと思っっているのか、口をパクパクさせている。

……私がなんとかしなければならないのか。

「……一夏」

名前を呼ぶとビクツと反応してから恐る恐る私の方を向く。

「はぁ。初めてにしてはよくやった方だぞ、お前は」

「えっ!？」

「相手は代表候補生なのだからお前が勝てないのは当たり前と言っ
て良い」

「うっ!？」

「お前はISの稼働時間が少ない。しかし、あれだけ動けたのだ。慢心しない程度に自信を持て」

「ち、千冬ねえ」

「えっと、ISは今待機状態ですが、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます」

……山田先生。わざとやってるのか？

一夏の方を見ると、山田先生を睨み付けていた。

「ただし、規則があるのでこれをちゃんと読んでおいてくださいね」

ドサッと『IS起動におけるルールブック』を取り出した山田先生。

いつから持っていたのだ？あと、そんな絶望しきった表情をするな。

「まあ、なんだ。今日はおしまいだ。帰ってゆると休め」

一夏が重い足取りで帰っていったのを確認したので山田先生の方を向く。

「さて、山田先生」

「は、はい！？」

「アレは何の真似だ？」

一歩一歩と山田先生へと近づく。山田先生は逆に後退る。

「何故、あんなタイミングで割り込んできたのかを聞きたいな」

わたしの更なる一歩に山田先生も一歩さがろうとする。しかし、もう壁際まで来ていてさがることが出来ないな。

王手だよ、山田先生。

「おおお弟思いですね!？」

「それで？」

「それで!？あーつと!？えーつと!？」

悪いが山田先生。

「時間切れだ」

私は右手をゆるりとあげて山田先生の頭を鷲掴みにする。

「いたたたた!!目覚める!？目覚めちゃいます!？」

ピット内に知っている人物の悲鳴が響き渡ったが私は気にしなかった。何故なら私が原因だからだ。

姉として一夏が心配になるときがあるのだが

一年一組のクラス代表は一一夏に決まった。当初は勝者であるセシリア・オルコットがクラス代表になる権利が与えられるはずであったが、辞退して一夏に譲った。『わたくしが相手でしたので一夏の敗北は仕方がないですね。それにわたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして』と一応述べていたが、おそらく一夏に惚れたのである。あの目を見れば一発で気がつく。

一夏はオルコットの恋心によってクラス代表に就任したのだ。やりたくもないクラス代表を押し付けられた一夏にしてみれば迷惑な話だな。

それはさておき……。

「ISの基本的な飛行操縦を実践してもら。織斑、オルコット。まずは飛んでみせろ」

今は授業中だ。

「ISの展開は素早くやれ」

一夏とオルコットの2人を生徒達が見える場所に来させて、ISの展開をさせる。

さすが自慢するだけはあるな、オルコット。展開スピードは及第点だ。

一夏も少々遅いが気になるほどではない。

「飛べ」

ISを展開した2人に指示を出すと、オルコットはすぐさま急上昇して小さくなった。

一夏も急上昇を開始したが、白式のスペックのわりには遅い。

「出力は白式の方が上だぞ」

私はインカムで一夏に言う。

声の届かないほどに上昇しているからこのような物で指示を出す必要がある。

オルコットの感じからして、今頃上で一夏と会話を楽しんでいることだろう。なんせ、邪魔者が居ないからな。

「一夏！！いつまでそんなところにいる！！早く降りてこい！！」

山田先生のインカムを奪うな、箒。

「はあ。教師のインカムを奪うな」

パン！！

箒の頭を出席簿で出来るだけ速く叩く。

「いつ！？」

それなりに速く叩けたな。

「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやれ。目標はそつだな、地表から10センチだ。出来るだけ目指せ」

私の言葉に小さい点が急激に面積を広げていき、途中からそれがISを纏った人だと認識出来るようになった。

まずはオルコットか。

地表ギリギリまで急降下するとオルコットはピタリとその場に停止した。

山田先生が地表との距離を測る。

「ちょうど10センチですね」

生徒の出来映えが嬉しいのか声が弾んでいる山田先生。

「よし。オルコット、その場から退ける」

さて、次は一夏か。10センチちょうどとは言わないがせめて1メートルくらいの場所で止まれよ。

空気を切り裂く音を響かせながら一夏が急降下してきた。その速さは弾丸を思わせる。

ズドオオン！！

訂正、爆撃か何かだな。グラウンドに穴が空いてしまったからな。まったく、砂を被ってしまった。

「この世界に嫌気でもさしたか？」

もしかしたら、一夏は膨大なストレスを溜め込んでいるのかも知れない。姉である私が気づけなかったとは。すまない一夏。

「あーっと、無いです」

それは安心した。つまりは唯の失敗だな、これは。

「ならば穴から上がってこい」

一夏がクレーターから上がってくる。

「情けないぞ、一夏。私が昨日教えてやっただろう」

腕を組んだ筈が一夏に向かって言う。

「大丈夫ですか、一夏さん？」

オルコットが筈を押し退けて一夏の前を陣取る。

お前達、今は授業中なのだが？

「ISを装備していて怪我などするわけないだろう」

確かにそうだがな、筈。もう少しは一夏を心配する気持ちを表に出せ。この前一夏が剣道に通ずる者が無防備に対して平気で木刀を振るうと私に報告してきたぞ。

「ISを装備していたとしても他人を気遣うのは常識ですよ」

そのことには賛成だが、今は授業中だ、私語は慎め。常識だぞ。

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮を被っているよりはマシですわ」

私の目の前で視線をぶつけ合う馬鹿2人。せつかくだから私の拳もぶつけてやろうか？

チラリと山田先生の方を見ると、この面倒くさい事態をハラハラしながら見ていた。

……止めていただきたいのだが？

パン！！パン！！パン

「はぁ。端っこでやれ馬鹿共。邪魔だ」

痛みに悶える箒を押し退ける。オルコットはISのシールドバリアーのせいでダメージを与えられなかった。

「織斑先生。どうして私も叩いたんですか？」

涙目の山田先生が問いかけてくるが時間が無いので無視する。

「織斑、武装展開しろ」

「はい」

一夏は自身が集中しやすい姿勢で雪片式型を呼び出した。

「ふむ、もう少し速く出せるようにな」

私の言葉に少々落ち込んでいる一夏を放っておいて、オルコットの

方を向く。

「オルコット、武装展開」

「はい」

さすがは代表候補、速いな。

「そんなところに向けて、お前は一体何処に誰を撃つんだ？」

横に銃身を向けて出すな。

「こ、これはわたくしのイ——」

「近接用の武装を出せ」

聞く耳持たん。

「……はい」

大いに不満あり、という顔しているが受け付けないぞ。時間が無いからな。

オルコットは近接用の武装を出そうとするのだが、なかなかイメージがまとまらないのだろう。初心者用のやり方で武装を呼び出した。

「何秒かかっている。実戦は待った無しだぞ」

「じ、実戦では近接の間合いには入らせません。ですから問題ありません」

……馬鹿か？

「初心者相手に懷を許した者が言うことではないな」

時間を確認すると授業が終了の時間だった。

「篠ノ之、オルコット。授業中の私語、授業妨害をしたから、その穴を埋めておけ」

原因は一夏なんだが、こんな疲れる2人に理不尽な目にあわされているから許す。

何度も叩いてやるぞ、馬鹿共へ

「今日から一年一組の担当になる十六夜いざなよ 時雨しぐれです。よろしく、織斑千冬先生」

私の目の前に一般に二枚目、つまりイケメンと分類される男がいた。年の頃は20代前半。端正な顔立ちで髪は輝かしい金色。瞳は本来人ではあり得ないオッドアイで左が赤で右が青。身長は180以上はある。モデルみたいだ。

……はつきりと言える。気持ちが悪いと。

私の思っていることなど欠片も知らない男は笑顔で山田先生に挨拶している。

……そもそも君は誰だ？

十六夜が周りの人間に挨拶をして回る間に私は近くにいた同僚から話を聞く。

曰く、2人目の男性でISが使えるらしい。

曰く、政府が無理矢理入れてきたらしい。

曰く、篠ノ之博士から直接ISをもらっただらしい。

あと、「美形で私の好み」らしい。……知るか。

ずいぶんと唐突に来たのだな。

此方に戻ってくる十六夜を眺めながら私は内心ため息をつく。

「行きましようか。織斑先生、山田先生」

ニコリと笑いかけてくる十六夜に私は何も言わずに一年一組へと向かうことにした。

「いやあ、美人2人と一緒に仕事が出来るなんてラッキーですね」

わざわざ社交辞令ご苦労。

「び、美人だなんて！？織斑先生の方が綺麗ですよ！！」
「どうだか」

相手の言葉を真に受けていちいち大変だな、山田先生。

はあ。教務室のすぐ隣に一年一組があれば良いな、と初めて思ってしまった。

この十六夜と言う男は色々な質問を投げ掛けてくる。

兄弟は？好きな物は？趣味は？好きな男性のタイプは？……職務質問か何か？

一年一組の教室にたどり着くと入口を陣取ってわめき散らす馬鹿者が居た。

見たことあるな。……まあ良い。

「退け」

「なによ！？うるさい！！」

此方に視線を移すことなく怒鳴る馬鹿者に私も実力行使にできることを1秒以内に決めた。

スツと右腕をあげる。もちろん、出席簿を装備して。

虫の居所が悪いので今は手加減などせず、力の限り振りおろす！！

バァン！！

「あが！？」

酷い声だな。

「SHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん」

私の顔を見た馬鹿者は酷くびっくりしていた。

……思い出した。凰鈴音だ、この小さいのは。

「織斑先生と呼べ。すぐに教室に戻れ。あと道を塞ぐな。此处は前の物じゃない」

すぐさま入口から退いた鈴音。

「またあとで来るから逃げないでよ、一夏！！」

「他のクラスはSHR中だから音量を下げる」

私の言葉が届いたかは知らないが鈴音は猛スピードで二組へと逃げ

ていった。

まあ良い、やっと教室に入れるな。

「一夏、今のは誰だ!？」

「一夏さん、あの子とはどういう関係で!？」

馬鹿2人を皮切りに教室内が騒々しくなった。

アレか?全員で私を怒らせたのか?

バアン!!バアン!!

とりあえず一夏の元へと詰め寄る筈とオルコットを叩く。

「席に着け、いい加減叩くぞ」

もう2人を叩いたのだが、見せしめなので指摘したら更に2人を叩くぞ。

意識が飛ぶまで叩いてやりたい

……今日はもう疲れたな。

教科書を読みながら私は思う。

教室の端で山田先生と一緒に私の授業を聴いている十六夜先生の登場が原因でSHRは騒がしいものになってしまった。

IS学園は女子校なので異性が珍しいのは分かる。だからといって質問攻めにして時間を無駄に浪費されるのは困る。十六夜先生も嬉しそうに質問に答えていくから手に負えない事態になってしまった。あまりに面倒な事態に軽くフラツとしてしまった。

山田先生がそんな私に気がついて支えてくれたから、床に倒れ伏すことはなかったが。

……改めて感謝する、山田先生。

騒動が治まって授業を始めることが出来た。

授業中静かなのが嬉しい。

一夏をチラツと見ると、真面目にノートを取っていた。実に喜ばしい事態だ。たぶん昨日失敗がそうさせているのだろう。

……それに比べてお前は何もしていないな、箒。

ノートを開いているだけで何も書かれていないし、シャープペンを持つ手は全く動いていない。眉間にシワを寄せて何かを考えているようだ。大方先ほどの事だろう。

しばらく箒の席の近くで止まってみるが、目を閉じているから全然気づいていないな。

考えがまとまったのか急に腕を組んで上機嫌な表情になった。

気持ちが悪いのだが。あと、クラスの視線を悪い意味で集めているぞ。一夏も恐ろしいモノでも見るような顔をしているのだが。

「……篠ノ之、答えは？」
問題など出していないが。

「は、はい!？」

何処に行っていたかは知らないがお帰り。

「答えは？」

再度問いかける。問題が存在しないから答えも存在しないが。

「き、聞いていませんでした」

正直だな、褒美をやろう。

バン!!

「聞けよ」

最早、語るまい。

授業再開で私は再び教室を回りながら教科書を読み説いていく。

が、しかし、馬鹿者がもう1人居ることに気がついた。自称エリー
トのセシリア・オルコット。

一見ノートをちゃんとノートを取っているように見えるが、手の動
きを見るとおかしい。一本線を引いているのかノートの端から端へ
と動いたり、円を描くようにぐるぐる動かしたりと。

オルコット……お前もか。

「はあ」

ため息が出てしまう。

オルコットの近くへと向かう。

急に進行方向と逆に歩き始めた私にクラスのほぼ全員が気がついて
ノートを取る手を止めた。

オルコットの席についたが当人は全然気がついていない。

とりあえずオルコットのノートを見てみると……線と円が大量に書
かれていた。

「……オルコット」

呼び掛けて見る。反応が無ければ叩くぞ。

「……例えばデートに誘うとか」

……オルコット、教科書にそのような事は書かれていないのだが。

「いえ、もっと効果的な」

……効果的な目覚めをプレゼントしよう。

バン！！バン！！

それも2発だ。

阻止限界点を突破しそうだ

「美味しそうですね」

ガヤガヤと賑わっている学食内で山田先生が私の食べている日替わりランチを物欲しそうな目で見ていた。

「人が食べてるものって美味しそうに見えるからな」

山田先生を軽くあしらいながら箸をゆるりと進めていく。

それにしても午前の授業は疲れた。

何に疲れたかと言えば、箸とオルコットが原因だ。時折ボーツと考え事をしていたり、急にニヤリと笑ったりして気色が悪かった。クラス中がたまに箸とオルコットをチラチラ見ていて、集中も何も無かったのだ。

「千冬さん、真耶ちゃん、相席良いですか？」

質問しながら勝手に私の向かい側に座る不屈き者が居た。

質問したなら、返事を返すまで待つのが常識じゃないのか、十六夜先生？あと、気安く下の名前を呼ぶな。

「いやいや、お疲れ様です」

とても良い笑顔で私達に労いの言葉を投げ掛ける十六夜に私は少々イラついた。

「そちらも初日からご苦労様」

視線を彼に向けるのも億劫だ。

「お疲れ様です十六夜先生。……あの、私の名前を……」

山田先生がおずおずと何かを十六夜に言おうとする。

「ん？真耶ちゃんの良いんですね？自己紹介の時に言っていましたから。あーっと今は食事時なので先生をつけるは勘弁してくださいよ、千冬さん」

残念ながら今この時も私達は教師なのだがね。それに山田先生が言いたい事はそんな事ではない。おそらく山田先生が言いたい事は私が言わんとしている事と同じだろう。

「十六夜先生」

箸を置いて十六夜を睨みつける。

「いやいや、気軽に時雨って呼んでくださいよ、千冬さん」

わざとらしく手を振る十六夜に私は出席簿でしこたま叩きたい気分になったと言っておこう。

「残念ながら私達が食事をしているこの時間も教師として務める必要がある。そのような軽い態度で接してくるのは非常に不愉快だ。君はこのIS学園において誰よりも新人であるのだから、最低限の礼儀をわきまえるべきではないのか？」

私の言葉にへらへら笑っている十六夜は止まってしまった。

しかし、すぐに再起動してしまう。

「千冬さん、肩の力を抜きましようよ。リラックスリラックス。そう思いますよね、真耶ちゃん。同僚なんですから、壁なんか作らないでフレンドリーいきましょうよ」

反省の色無し。

はあ。そろそろ我慢の限界だ。

「そんな怖い顔しないでくださいよ、千冬さん。せっかく綺麗な顔してるんですから笑顔でいてくださ……あがつ!？」

べたべたしたような気持ちの悪い言葉を吐き出す十六夜のこめかみに凄い勢いで何かが激突した……2発も。

音をたてて床に落ちるのは一対の箸。

飛んで来た方向に目を向けると、顔を逸らす一夏が居た。

助けてくれたのは嬉しいが箸を投げるなよ。

落ち着け！！それは塩だぞ！？（前書き）

飛ばして行きます。ペースではありませんよ。

落ち着け！！それは塩だぞ！？

気がつけばクラス対抗戦になっていた。

時が経つのは早いな。

私は山田先生、十六夜、オルコット、箒と共に試合を観戦していた。一組の一夏と二組の鈴音がアリーナで激しく動き回りながらぶつかりあっていた。

オルコットと箒はハラハラしながら試合を眺めている。山田先生もおそらく同じ思いで眺めているだろう。

十六夜は今か今かと何かを待っている雰囲気だ。何を待っているかは知らないが。

…… コーヒーを飲んでいる私には関わり合いの無い事だが。

コーヒー片手に一夏の試合を観ている私はどうなんだろうな？

まあ、勝っても負けても構わないから、こんな不真面目な観戦が出来るのだろう。

「衝撃砲ですわね」

モニターで試合を観戦している箒の呟きにオルコットが答えている。

離れれば衝撃砲。近づけば青龍刀の餌食になる状態で一夏がとれる行動はイグニッションブーストによる奇襲位だな。しかもチャンスは一度だけ。幸いにも雪片式型の力があるから可能なやり方。それがないければ、負けるだけだろう。

ばーっとしながらそう考えていると、一夏は私の考えた通りの行動を選択した。しかし、鈴音に必殺の一は届かなかった。

突然の衝撃と共にアリーナに侵入者が現れたからだ。

……とりあえずコーヒーおかわり。

私が異常事態にも関わらずコーヒータイムを堪能していると山田先生が一夏達に退避するように呼び掛けていた。

「織斑くん聞いてます！？ 凰さんも！！ 聞いてます！？」

焦っているな山田先生。

「落ち着け山田先生。本人達がやると言っているならやらせてみても良いだろう」

「織斑先生、のんきに言ってる場合じゃないですよ！！……あと、落ち着きすぎです！？」

顔を赤くした山田先生が必死に叫ぶ。

「とりあえずコーヒーでも飲んでゆるりとする事だ」

私は2つの容器を取り出して山田先生に見せる。片方には「塩」、もう片方には「砂糖」と書かれている。

「どっちを入れる？」

「砂糖に決まってますよ！！」

そう言って塩の容器に手を伸ばす山田先生。

私はコーヒーに塩をぶちこんで山田先生に渡す。

「君はチャレンジャーだな」

まさか塩を選ぶなんて。

「あの……塩ですよ、それ？私が選んだのは砂糖ですけど」

「いや、まっすぐ塩に手を伸ばしていたが。落ち着けば間違わなかったのにな。まあ、落ち着きのない自身を恨みながら飲むと良い」

山田先生がコーヒーを飲むのを確認すると、私もコーヒーに口をつける。

山田先生の絶叫が響き渡り、私は今が非常事態なのだと思います。

この一杯を飲み終わる前に事態が収拾すること願うばかりだ。

さあ、主役が誰か教えてやるよ！！ by 十六夜（前書き）

ビーム砲……まあ、シンプル過ぎて。とりあえず、ガンダムで言うならG-バードでしたっけ？それを想像してください。

さあ、主役が誰か教えてやるよ！！ by 十六夜

アリーナのシールドを破り侵入してきたISに俺は自らの力をこのアリーナ中見せつける時がきたのだと感じた。

すぐに行動する。今すぐ舞台に上がらなきゃならないから。

アリーナ内に入るために、ISを展開する。

見た目は一夏の白式と同じ形のISだが、色合いは真逆の黒。右手にビーム砲を持ったこのISの名前は『黒印』。束が俺の為だけに造りあげたIS。

さてさて、鈴を救いに行きますか。一夏はそこで飛んでいろって言いたいが千冬さんのフラグに必要なから助けます。だが、助けるだけ。お前のハーレムは俺の者。ジャイアンは素晴らしい名言をのこしてくれた。

55

アリーナの遮断シールドに向けてビーム砲『黒龍』を放つ。

高出力のビームがシールドを破壊したので、アリーナへと踊り出る。

人形が俺の存在に気づいてビームを放つ。

ちんけなビームだな。

回避して黒龍の砲身を人形に向ける。

「パワーがダンチなんだよ！！」

人形よりもデカイ閃光が人形の右腕を跡形もなく消し飛ばす。命中した衝撃にバランスを崩した人形。

俺は続けざまに黒龍を発射して人形を撃墜する。

一夏と鈴は俺の強さに目を見開いている。

「怪我はないよな？」

主に鈴に向けて声をかける。

緊張を解いた2人。

だけど、まだ活動出来る人形が一夏に向けてビームを撃とうとする。

もちろん俺はわざと見逃す。千冬さんフラグをたてるために。

一夏が撃墜されて落ち込む千冬さんに俺が優しく声をかける。そこを皮切りに段々俺に甘えてくるようになる千冬さん。……すげえ良
い！！

一夏がビームで落ちたあとに俺は黒龍で人形を破壊して終了。

一夏は保健室に運ばれ、俺の前には千冬さんが。コーヒを俺に渡してくれる。

ヤバイな、すでに俺にメロメロ！？

嬉しくなってコーヒをガバツと飲んで……俺は絶叫した。

……しよっぱすぎる！？

しよっぱさに悶える俺に千冬さんは色々怒鳴りつけてきた。

……何故だよ！？

場の空気を察したなら出ていってくれ（前書き）

頭は痛いし眠い。つまりは寝不足。だから内容も……。
言い訳にしかありませんね。
では、どーぞ。

場の空気を察したなら出ていってくれ

保健室に入るとまず目に入ったのは、何故この場に居るか分からない十六夜とその十六夜を睨みつけている一夏。

ふむ、一夏は大丈夫だな。

面倒だから十六夜が居ない定で一夏の元に行く。

見た目にも怪我は無しだな。

「大丈夫か？」

一応の確認をする。目に見えない怪我や取り返しのつかない後遺症が無いとは限らないからな。

「たぶん大丈夫だと思う」

顔だけを私の方に向けた一夏が言う。

一夏の答えを聞いてひとまず安心した。

私は医学の知識など持ち合わせていないので、本職の判断を聞くまでは油断出来ないが。

「一夏くんは無事みたいですよ、千冬さん。いやー、まさかあんなになっても動けるISだなんて。まあ、結果良ければ全て良し！」

馬鹿が1人で盛り上がっているのだが。
あれほど、説教したのに反省の色がまるで無いな。

「一夏、無事で良かった」

一夏の頬を優しく撫でる。

命を落とす危険な状態でも冷静さを保ちながら対処出来たことを私は誇りに思う。

同時に叱りつけたい気持ちも少なからずある。今回は言わないでおく。

一夏の頬から感じられる体温が安心させてくれる。

「家族に死なれたら寝覚めが悪い」

私の言葉にばつが悪そうな顔する一夏。

……言葉の選択を誤ったのか私は。

「千冬姉」

「なんだ？」

「心配かけてごめん」

負い目を感じさせてしまったか。本来心配をかけているのは私だと言っのに。

「気にするな。お前が私より先に死ぬはずが無いからな」

謎の理論だが姉として私より先に一夏を死なせるような事はしない。

「まあ、一夏くんは頑張つて強くなりなよ。その間は俺がみんなを守ってあげますから」

バシン！！

笑顔で怪我人の肩を叩く十六夜。
肩を叩かれた一夏は痛みに悶えている。

Bannon！！

だから私は十六夜の頭を力の限り叩く。

「お前は常識の欠片も持ち合わせていないのか？怪我人を叩くなどして」

もはや害虫でしかない十六夜を私は全力で保健室から追い出して扉に鍵をかける。

「大丈夫か、一夏？」

一夏の頭を撫でて痛みを和らげる。痛みが和らぐかは分からないが何もしないよりは良いだろう。

「もう少し休め、一夏。眠るまでは居てやる」

久し振りの姉弟だけの空間が私に安らぎを与えてくれる。
一夏も同じ思いなのか、私に頭を撫でられながら眠りだした。

「ゆるりと眠れ」

止める！！私達は今限界だ！！（前書き）

あれ？キャラが変わってきた？

それとも十六夜がウザくなっただけ？

止める！！私達のもう限界だ！！

今日も変わらず教務室から一年一組の教室に向かう。

何時もと変わらないルートだが、面子が違う。正確に言えば面子が違うのではなく増員したと言えば良いのかな？

山田先生に十六夜が居るのは最近では当たり前になってしまったが、今はそこに金色と銀色の転校生が混ざっている。

金色の方はフランスから来たシャルル・デュノア。男としては身長が些か低い。第三の男性でISが使えるらしい。

それは今どうでも良い。問題は銀色の方だ。

「お久し振りです、教官」

ビシッとした姿勢で私に挨拶をしてくるのは、ラウラ・ボーデヴィッヒ。ドイツから来た軍人。

「久し振りだな、ボーデヴィッヒ」

SHRの時間があるから簡素な挨拶だけですませる。

すぐさま一年一組まで向かう。十六夜が来る前はゆるりと教室に向かうのが少ない安らぎだった。

あの日々が懐かしい。

教室に着くと、山田先生と十六夜を先に入室させて、私は2人に呼んだら教室に入るように言う。

「分かりました」

「了解しました」

爽やかな笑顔で返事をするデュノアとビシッとして返事をするボー
デヴィツヒ。

果てしなく面倒になりそうだな。

そもそも、他所にまわしてほしいのだが。此方はオルコット、箒、
一夏の3人で精一杯だ。これ以上負担を増やすな。

……ブリュンヒルデの称号が原因か？だとするならば、歴代のブリ
ュンヒルデをIS学園で雇え。

「はあ。諸君おはよう」

ため息と仲良く教室に入る。

朝からため息とは。

教室に入れば高速で自分の席に着席する生徒達。

教壇に立つと一番に目に映ったのは嬉しそうにしている一夏。

そういえば、わざわざ夏用のスーツを持ってきてくれたな。

「山田先生、ホームルームを」

山田先生と場所を代わる。

「聞いて驚けっつて奴ですよ、皆さん」

山田先生に任せたのに何故にでしゃばる、十六夜。

山田先生が凄い目付きで見てるぞ。あの山田先生が。

「今日はなんと転校生を紹介しますね。しかも2人」

山田先生が私の方にやって来た。

不満な顔をしているな。

色々振り回されている山田先生だが、仕事に誇りを持っているのだろつ。

私は山田先生の頭を軽く撫でる。
そして同時に出席簿を構える。

「お願いします、織斑先生」

「心得た」

小声でのやり取りのあと、わたしは振り上げた出席簿を馬鹿に振りおろした。

やらかしたな、ラウラ？

「改めて、今日はなんと転校生を紹介します！！しかも2名です」

山田先生が嬉しそうに語る内容に生徒達は無反応だった。まるでその内容を知っていたかの如く。

さつき馬鹿が上機嫌で喋っていたからな。この無反応加減も当然だ。

「入ってこい」

わざわざ反応してくるまで待つなんて時間の無駄だ。

教室のドアが開き、金色と銀色が入ってきた。

先ほどの反応の無さが嘘のように食い入るように転校生を見つめ始めた生徒達。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

当たり障りのない自己紹介だな。まあ、当たり前か。女子は群れるから仲間ハズレになると面倒だから。……デュノアは男だから関係無いか。

「お、男？」

誰かが呟いた。別に誰でもかまわないが。

確かに自己申告されなければ男には見えないな。男装した女にしか見えない。しかし、世の中は男みたいな女や女みたいな男がいるの

だから良いだろう。

「きゃ……」

ん？

「きゃあああー！！」

1人が騒ぐと周りに感染してより騒がしくなる。

「男子！！しかも3人目」

2人の間違いだろう。1人は馬鹿者なのだから。

「しかもうちのクラス」

此方としては許容量限界で他に行ってほしかった。

「美形！！守ってあげたくなる系の！！」

何系でも良いだろう。

「地球に生まれて良かったー！！」

地球以外に生物がいたとは聞いたことがないぞ、私は。私が知らないだけかも知れないが。

「騒ぐな。静かにしろ」

とりあえず五月蠅い。今はHR中だ。

「みなさん静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

私に続くように山田先生が注意する。

次の自己紹介はラウラなのだが。我関せずとも言いたいのか、腕を組んで黙りを決め込んでいた。視線だけが私の方を向いている。

「はあ。挨拶しろ、ボーデヴィツヒ」

「はい、教官」

……言い忘れていたな。

「ここでは織斑先生と呼べ。もはや私は教官ではないし、お前は一般生徒として扱われるのだから」

「了解しました、教官」

話を聞いていたのか？

Bannon!!

「織斑先生だ」

聞いて覚えられないなら、体で覚えろ。

「りよ、了解しました、織斑先生」

分かればそれで良い。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

……はあ。まあ、想像していたよりはマシだな。

「あの……以上ですか？」

さすがに薄っぺらな内容に山田先生が確認する。

「以上だ」

泣きそうな顔するな山田先生。挨拶しないよりはマシだろ。

私が心の中で山田先生を慰めているとラウラが一夏の方へと歩を進めていた。

「貴様が……！」

初めてクラス中が聞いたであろう感情のこもった声を出した。

バシン……！！

いきなりの平手打ち。

あまりにいきなりの仕打ちに一夏はきょとんとしている。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

ラウラ、お前が認めなくても私と一夏は姉弟なのだが。
それよりも。

「あの人は誰だ？」

私の事だというのは分かる。

「もちろん、教官の事でし」

ビシツとして答えるラウラに私は笑う。

私の仕掛けた罠にかかったな、馬鹿者が。

バン！！

「先ほど言ったかも知れないが、織斑先生だ」

くだらない理由で一夏に手をあげるな。

口は禍のもとと言うだろ？いい加減に学べ

……足りない。

第二グラウンドで私は思う。

朝食が足りなかったという訳ではない。

単に人数が2人ほど足りないだけだ。

今日は一組二組合同の実戦訓練をやるのだが……教師が私と十六夜しか居ないのは何故だ？そもそも十六夜は教師なのか？

辺りを見渡しても一二組の生徒達と十六夜以外に人影がない。

後に山田先生が来るのだとしても明らかに人手不足。普通の授業ならともかく、実戦訓練は場合によっては怪我人が出てしまう。危険性が少しでもある授業に3人はやはり少ない。

……ISにはシールドバリアーがあり、今回の授業は起動してもらうだけで良いので3人いればなんとかなる。しかし、朝から精神的に疲れている私の主観では3人では足りない。だから2人ほど増員してほしい。

ついでに一夏とデユノアがまだ来ていない。

腕を組んで目を閉じる。

「遅い」

ボソッと呟く。

「すみません!!」

……あれ？

声のした方を向くとすでに一夏とデュノアが居た。

気づかなかった。何時来たんだ？

「謝罪はいいから列に並べ」

内心の驚きを悟らせないために私は視線を列に向けながら言う。

一夏達が列に入り、やっと授業が始められる。

「ずいぶんゆつくりでしたわね」

オルコットが一夏に対して話しかけていた。

授業が始まる前から授業妨害か、オルコット？

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

オルコット、お前は どうして私を困らせるように私語を始めるのだ？

「道が混んでいたんだよ」

一夏も返答するな。ちなみにあと一回私語をしたら出席簿だぞ。

「ウソおっしやい。いつも間に合うくせに」

いつも五月蠅いな、オルコット。お前は出席簿二発確定だ。

「ええ、ええ。一夏さんはさぞかし女性の方との縁が多いようすから？」

確かに多いが面倒くさすぎる奴ばかりだよ。

「そうでもないと2月続けて女性からはたかれたりしませんよね」

出席簿四発だ。

「なに？アンタまたなんかやったの？」

鈴音、お前もか。

私はゆるりと騒音の元へと向かう。右手に出席簿を携えて。

「こちらの一夏さん、今日来た転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ！？一夏、アンタなんでそう馬鹿なの！？」

色々言われている一夏は私が向かってきているのに気がついていていいのか、反論もせずに私を見ている。まるで救いが来たみたいな顔をしている。

「お前等はどうして馬鹿なんだ？特にオルコット、お前は何度目だ？」

相手が振り向く前に出席簿を振るう。

バアン！！バアン！！バアン！！バアン！！バアン！！バアン！！
バアン！！

今時の出席簿は頑丈な作りになっているな。

受ける、我が弟の一撃！！

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

青空の下、ようやく授業を始められる事に私は嬉しく思う。

一組と二組が揃っているので返事に気合いが入っていて実に良い。

「何かというとすぐにポンポンと人の頭を」

「一夏のせい一夏のせい一夏のせい」

全部自分達のせいだろうが。なんでも人のせいにするなよ。一度くらいなら私も注意だけで済ますが、何度も馬鹿みたいに繰り返す者に容赦は出来ない。

「鳳、前の生徒を蹴るな」

一夏を蹴るな。気づかれていないと思っているようだが、此处から全部見えてるぞ。

天網かいかい疎にして漏らさず、という奴だな……確か。

「問題児2人に戦闘の実演をしてもらおう。鳳、オルコット」

明らかに嫌そうな顔をするな、鈴音、オルコット。迷惑かけた分だけ償え。

「ちょっと！！なんで私も問題児扱いに！！」

自覚が無いのが悲しいな。

「いいから前に出る」

嫌々前に出る2人。

あまり使いたくない手段だが仕方ない。

「やる気をだせ。アイツにお前達の強さを見せて気をひくチャンスだぞ」

小声で燃料を投下する。ここで一夏でなくアイツと言うのは私が一夏をダシにするのを良いとは思えないから。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!!」

「まあ、専用機持ちの実力の違いを見せる良い機会よね!!専用機持ちの!!」

……単純で助かる。

「それで、相手はどちらに?」

その言葉を聞いて、一步前に出る奴が1人。

十六夜時雨!!

だけど無視する。はつきり言って時間の無駄だから。

私が馬鹿者を無視していると空気を裂く音が聞こえ、近づいてくる。

「あああ！？退いてください！！」

ガシッ！！

ISを装着して何故か突撃してきた山田先生を十六夜が自身のISを展開して抱き抱えていた。俗に言うお姫様抱っこだな。

「危なかったですね、真耶先生」

笑顔で山田先生に語りかける十六夜に対して、山田先生は顔を赤くしている。

「おろしてください！！」

「分かりました」

十六夜が山田先生をおろすと、山田先生はすぐさま此方まで走ってきた。……ISなら飛べよ。

「ななななんなんですか！？気持ち悪いですよ気味が悪いですよ気色悪いですよ！？」

凄いな、小声で叫んでる。

「気持ちは分かるが落ち着け、山田先生」

山田先生の肩を掴んで落ち着かせる。

「良いか？良く聞け山田先生。君は今から凰、オルコットと二対一で戦ってもらう」

「今は無理です！！」

「君は元代表候補生だ。あんなひよっこ共軽く捻れる。鬱憤晴らしに倒してこい。それなら先ほどの不快な感触を紛らわせる」

山田先生を復活させるために私は山田先生の目を見て必死に話す。

良し、良いな。大丈夫だな。

「凰、オルコット。相手は山田先生だ。存分にやれ」

「二対一で？」

「いや、さすがにそれは」

専用機で二対一なら勝負にもならないと言いたげだな。

「お前達が負けるから気にせずにやれ」

私の言葉が気に障ったのかISを展開して武器を構える。

「頑張つてこい、山田先生」

いつもと違い冷静で鋭い雰囲気醸し出す山田先生が空へと舞い上がる。

悪いが凰、オルコット。山田先生の気晴らしに付き合ってやれ。

結果は圧倒的な差をつけて山田先生が勝った。気晴らしになったらしく、とても良い笑顔で此方に戻ってきた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。それに専用機だから必ずしも強い訳ではないと。以後は敬意を持つように」

尊敬の眼差しで山田先生を見ている生徒達に一応言っておく。

「専用機を持つ8人を各々リーダーとして8グループを作れ。実習を行う。では、分かれろ」

言った瞬間に後悔した。

皆一夏とデユノアに集中して集まったからだ。

「はあ。出席番号順に並んでグループを作れ!!」

バババつと音に出来るくらいの速さでグループが完成する。

最初からそのくらいの速さでやれよ。

とりあえず、あとは山田先生に任せる。

「千冬先生、俺も生徒達に教えにいきますよ。初歩の初歩で生徒同士でやるにしてもまず先生が手本を見せるべきですよ」

私の肩に手を置いて語りかけてくる、十六夜。

……セクハラで訴えれば山田先生の件も入れて勝てるな。

「これは生徒同士でやる授業だ。私達がいちいち介入することではない。自分達でやることに意味がある」

「いやいや、それでも……。ああ、そうですね。千冬先生が言わんとしている事が分かりました。まったく、照れずに正直に言ってくれば良いのに。大丈夫ですよ。俺はみんなの俺ですから。ちゃんと見ていますよ」

……何か阿呆みたいな勘違いをしていないか？

あまりにあきれて何も言えないな。

ドオオオン！！

十六夜に背を向けて離れると後ろで凄いい衝撃音が響く。

ゆるりと後ろに振り向くと尻餅をついた十六夜がいた。彼が先ほどまで立っていた場所には雪片式型が半分ほど埋まる形で突き刺さっていた。

一夏の方を見るがまるで何事もなかったように女子生徒達にISの起動を教えていた。

一夏の近くにいた女子達がひきつった顔をしているが。

頼むからくだらない理由で殺人犯にならないでほしい。

疲れたなら休憩しよう、話が分かる同僚と（前書き）

迷子ですよ。超迷子ですよ。

疲れたなら休憩しよう、話が分かる同僚と

今日は土曜日……？土曜日か土曜日なのか？

あまりにイラついているから正常な判断が出来ていないぞ。由々しき事態だ。

目の前には山積みになった紙紙紙。私のデスクのほとんどを陣取り、自由なスペースがあまりに無い。

IS学園のデスクが一般のそれより大きい作りになっていてもだ。

この終わりの見えない書類群の原因は私の左隣にあるデスクの主。それ以外にも原因はあるのだが。

「まだ生きてますか、織斑先生？」

この事態を心配した同僚が声をかけてくる。生死確認のために。

「生きてはいます。ええ、生きては」

ただ手はもう死んでいる。

頑張つて書類を処理してはいるが、減ってる気がしない。……いや、たぶん減ってはいる。ただ、頭が一枚一枚処理するのに手一杯で他を認識出来ていない。

「十六夜先生は何をやっているんですかね？自分の仕事をしないで」

同僚が私の左隣にある綺麗なデスクを一瞥してから言う。

同時に私のデスクの空いたスペースにコーヒーを置いてくれる。

「ありがとうございます」

礼を言つてコーヒーに口をつける。

口の中に広がる苦味が私の脳を無理矢理再起動をする。

「第一印象は良かったのに。幻滅しちゃったわー。仕事をしないなんてやる気あるのかしら？」

知りません。やる気がないなら追っ払って新しい人を入れてほしい。十六夜よりは役に立つだろうから。

「あれでESを起動できるものだから質が悪いわ。調子に乗っているのかしら」

「だとしたら教師失格だな」

手を止めてコーヒータイムにする。

ああ、すぐに寝たい。

目を閉じてしばし休憩。

「おかわりいる？」

「お願いします」

今は一段と優しさが心にしみる。涙が出そうだ。

「休憩の途中失礼します、織斑先生」

声がしたので目を開けると先ほどとは違う同僚の先生が居た。

嫌な予感がする。

「先ほどそちらの受け持つ生徒達がアリーナではしゃいで居たので、一応報告です」

「誰だ？」

面倒事がやってきたな。

「確か……専用機持ちの転校生2人と弟さんです。注意はしましたが、1人には無視されました。ああ、それから、お荷物さんが止めにも入らず眺めてました」

「あの馬鹿」

報告を聞いて机に突っ伏してしまった。額を勢い良くぶつけてしまったが痛みが感じられない。

「あのお荷物は遊び呆けて、挙げ句に問題発生に何もしないなんて……」

いつの間にか戻ってきていた同僚が声をあらげて批難する。批難しながら私のデスクにコーヒーを置いてくれるからありがたい。

ちなみにお荷物「十六夜だ。役に立たなすぎて仕事は十六夜にまわってこない。周りがまわさない。報告書も真面目に書いていないから、すぐさま戦力外通知が渡された。本人は全く気づいてないが。」

「なんでいまだに存在するのかしら、石狩先生？」

「日本政府が五月蠅いからでしょう。それに篠ノ之博士がISを造ったのも関係するでしょう、かたじけな語奈先生」

「背景が面倒だから現場の意見など切り捨てられるしな」

体を起こして会話に参加する。

「語奈先生、コーヒーありがとうございます」

「どういたしまして」

「少し休憩がてら、色々話しますか？」

しばらく書類は見たくないからちようど良いな。

「賛成だ。私も少々ゆるりしたい」

有意義な時間を過ごせることに私は笑った。

「それは反則笑顔ですよ」

「同性なのにドキッします」

……幻聴が聴こえる！？

一度で諦めるよ、迷惑だ

ある日、IS学園の廊下で私はヘッドハンティングを受けた。
曰く、外国で教官をしてほしいのだと。

「なぜこんなところで教師など!!」

実は以前から話を持ちかけられている。その度に断っているのだが、
しつこく誘ってくるのでいい加減うざったく感じる。

「何度も言うが私には私なりに此処にいる理由があるんだ。諦める、
ラウラ」

そして今すぐ教室に戻れ。

「このような極東の地にいるような理由とは何ですか!!」

声を荒げて私に問いかけてくるのはラウラ・ボーデヴィツヒ。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を」

先ほどから教官教官と。此処では先生と呼べと言ったはずだが？

「此処では貴女 능력は半分も生かされません」

何故半分も生かされないと断言できる。私が手を抜いていると言いたいのか？

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません

ん」

それを決めるのはお前ではなく私達教師の役目だ。軽々しく口出しをするな。

「何故だ？」

ところで、誰かが盗み聞きしているな。曲がり角の先から聞こえていた足音が先ほどから聞こえていない。引き返す足音もないから止まって会話を聞いているのだろう。

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなどあつてはなりません！！」

「はあ。良く喋る。べたべたとまるで自分の言い分が正しいみたいに。高々15しか生きてないのに、ずいぶんと偉くなったな」

目の前にいるラウラを私は睨みつける。

私が此处でやってきたこと否定された気分だ。表面だけしか見ていない知ったかぶりごときに。

蛇に睨まれた蛙とはこの事か。……勉強になったな。

それにこれだけですくむような熱意なら止めるんだな。時間の無駄だ。

「わ、私は」

ラウラの声が震えている。私の言い方や視線に恐怖しているのだろ

う。

相手に恐怖を与えるほどに私は自制がきかない状態にあるらしい。
原因は……もはや語るまい。

「授業が始まるな。皆まで言わず教室に戻れ」

出来るだけ平静を装った声でラウラにこの場から消えること求める。

私の切なる願いが叶ったのか、怯えが貼りついてた顔を無理矢理
無に戻して足早に去っていった。

「出てこい、織斑。盗み聞きなどしてないで」

私の言葉に曲がり角から一夏が出てきた。顔は怒られるんじゃない
かとビクビクしている。

別に怒らないからそんな顔をするな。少しだけ傷つく。

「注意はしないから教室に戻れよ」

一夏に近づき頭を軽く撫でる。

おお、みるみる赤くなっていくな。

「え、は？はい？じゃあ、教室にすぐ戻ります！！今すぐすぐさま
戻ります！！」

混乱した一夏はもの凄いニヤニヤした笑顔で廊下を爆走していなくな
った。

「……はあ」

何故に姉大好き人間になったのだ。いや、嫌われるよりは良いのだが。

とりあえず、ゆるりと教室に向かおう。

騒動を起こすのは私のクラスだな（前書き）

軽くですが語奈先生と石狩先生の容姿説明が。本当に軽くです。

騒動を起こすのは私のクラスだな

今日の授業が終わり、今は放課後だ。

私は例によって書類処理をしている。前よりは少ない数なので幾分かは気が楽だ。

「居ませんねー、お荷物さんは」

私のデスクにコーヒーを置いてくれる語奈先生。

肩口まで伸ばしたフワツとした髪に無害そうな笑顔の女性で生徒達に好かれている先生。

「空気汚染器みたいな奴など居ない方が良い」

居れば面倒事を起こす奴など必要ない。

手を止めて持ってきてくれたコーヒーに口をつける。

最近ブラックコーヒーが苦いと思わなくなってきたな。味に慣れすぎてしまった言うことか。まだ苦味を感じていた頃が懐かしい。

「そういえば、今回の学年別トーナメントは異例のタッグマッチですね」

もはや話題を広げる気もない語奈先生は今度行われる学年別トーナメントに話を移した。

私としても馬鹿者の話を続けていると負の感情でどうにかなりそう

なので助かる。

「前回のクラス対抗戦でISが乱入してきた事が焦らせているのだろっ」

「迷惑な話ですよ。普段処理する書類とは別にやらなきゃいけないモノが出てきますし」

急遽決定したことだからな。迷惑すぎる。私のクラスには問題児が集中しているから他の教師陣よりも忙しい。

2人で雑談しながらゆるりと時間を過ごす。

「おかわり要りますか？」

ああ、このわずかな休みが何よりの楽しみだ。

気のせいかな外が騒がしい。

語奈先生も気がついたようで教務室の扉に目を向ける。

「緊急事態です、織斑先生!!」

勢いよく入室してきたのは石狩先生。ショートヘアで鋭い目付きをした女性ですぐさま私の方へと向かってくる。

「じ、じつ……たい……」

全力で走ってきたのか、石狩先生は肩で息をしている。おかげで何を伝えたいのかが判明しない。

「落ち着け、石狩先生」

そうしなければ、何も分らないからな。

「はあはあ……もう大丈夫です。それでは報告します。第三アリーナにて、ラウラ・ボーデヴィツヒ、凰鈴音、セシリア・オルコットが過剰な戦闘を行っています」
早速問題を起こすのかラウラ。

「語奈先生。申し訳ないがおかわりは帰ってきてから頂きます」

立ち上がりすぐに走り出す。

第三アリーナへたどり着くと人だかりが出来ていて邪魔になっていた。

「退け!!」

たった一言発するだけでモーセのように人だかりが割れて道を作る。

あの問題児共もこれくらい言うことを聞けるなら苦労しないのだが。

観客席の方は人で溢れかえっているだろうからピットに入る。

中でIS用のブレードを一本拝借してアリーナへと走る。

アリーナ内にはボロボロにされた鈴音とオルコット。一夏を狙うラ

ウラ。それを妨害するデュノアと言う専用機持ち達の不出来な舞台が形成されていた。

まったく、手のかかる事をしてくれるな。

騒動の中心へと向かう。

一夏の雪片式型とラウラのプラズマ手刀が幾度なくぶつかり合う中に身を踊らす。

横薙ぎに振るわれた手刀をブレードで防ぐ。

く！？やはり生身では衝撃が強いな。

「な！？教官！！」

驚くラウラに構わず、瞬時に後方にへと振り向く。

目の前には迫りくる雪片式型。

振り向きざまに右の拳を雪片式型の腹に当てて刃を無理矢理逸らす。

「ち、千冬姉！？」

ラウラ同様に驚く一夏。振りおろされた刃は私の体から十センチほど離れた場所に沈んでいた。

「あまり手を焼かせるなよ、ガキ共」

私の乱入に周りは啞然としている。ただ、一夏だけが私の右手を凝視していたが。

「模擬戦をやるのなら構わないがアリーナのバリアーを破壊するまでに発展させるのなら話は別だ。お前等の馬鹿騒ぎは学年別トーナメントで終わらせる。それまでは戦うことを禁ずる」

「教官がそう仰るなら」

素直にISを解除するラウラ。そして此方を見ないままアリーナを出ていった。

「織斑、デュノア、お前達もだ」

ラウラの方へと向けていた視線を一夏の方へ向けると、視界一杯に一夏の顔が映り込んできた。

いつの間にこんな近くに。……あまりに近いぞ、一夏。

「何やってんだよ、千冬姉!!」

一夏に怒られて抱きしめられた。

……私が何をしたんだ？

一夏が2人を無視することについて

例えば、例えばだが。固い岩に力一杯に拳を突き出したらどうなるだろうか？

「千冬姉、頼むから無茶しないでくれ」

殴った手から出血するという結果になった。

「織斑先生と呼べ」

保健室の中で私は一夏に注意した。

確かに無茶した私が悪いが。そもそも、ああでもしなければ止まらないだろ。周りの声など聞こえていなかったみたいだしな。

自分の右手に視線を落とすと、包帯で過剰なくらいに巻かれていて指を動かせなくなっていた。

「……やりすぎだろ」

「いや、千冬姉が無茶しないようにするには足りないくらいだ」

「織斑先生な」

私の主張はもはや一夏には届いてなさそうだ。
ところでだな、あそこのベッドで不貞腐れている2人を構ってやつたらどうだろう？

私はベッドの方をチラリと見た。

もの凄い不満な顔した鈴音とオルコットが横になっていた。
私でも分かるほどの構ってほしいオーラが出ているのだが……一夏、
どうする？

「それにしても、怪我が酷すぎなくてよかったぜ」

いや、この包帯グルグル巻きの何処が酷くないんだ？

「あのドイツ人……しばらく」

私の記憶ではお前のブレードで怪我した気がするのだが。

「別に助けられなくてよかったのに！！」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ！！」

声を張り上げてまで構わたいのか、鈴音、オルコット。だが、一夏はまるで振り向く気配が無い。居ないものとして扱っているのか？
だとしたら不憫すぎるな、あの2人。

「痛みはないよな、千冬姉？」

「さすがにもう退いた」

私も2人を居ない事にするか。

しばらく、一夏の気をひきたいが為に喚く2人を無視したまま、私は目を閉じてゆるりとした時間を過ごした。

「いい加減に諦めたら？ 2人共。見てて悲しくなるよ」

目を開けると飲み物を買いに出たデュノアが戻ってきた。

「うつつ五月蠅いわよ!？」

「別に一夏さんに構って貰いたくてやっているわけではありませんわ!？」

オルコット、駄々もれだぞ。

「……なんかゴメン。はい、ウーロン茶と紅茶!！」

「虚しくなるから謝らないでよ」

「そうですわ」

酷い空間になっているな、あそこは。

……外が騒がしいな。近づいている？

私が疑問に思っていると、大量の生徒達が雪崩れ込んできた。

「私と組もう、織斑くん」

「いや、私と」

「デュノアくん」

……保健室なんだがな、此処は。

私が頭を抱えている中、生徒達は話を進めていた。

「悪いな。俺はちふ……シャルルと組むから諦めてくれ!!」

一夏がそう言うのと、生徒達は騒動を撒き散らしながら帰って行った。ただし、面倒なのは近くにいた。

「あたしと組みなさいよ!!」

「クラスメイトとしてここはわたくしと」

話を聞いていたのか馬鹿2人。

「ダメですよ」

一夏に組むように強要してくる2人を止めるように入室してくるのは山田先生。なんだか顔色が悪いな。

原因は山田先生の後から入ってきた十六夜だろうな。

十六夜は私の包帯でグルグルにされた手を見て近づいてきた。

「大丈夫ですか、千冬さん？何かあったんですか？包帯なんか巻いて驚きましたよ」

そう語りながら近づいてきた十六夜は私の怪我している方の手を両手を包み込んできた。

……凄いな。包帯越しなのにゾツとした。

私が悪寒に襲われていると、十六夜の手が一夏に弾かれた。

「怪我した部分を掴むなんて十六夜先生は常識がないんですね」

笑顔を浮かべた一夏が正論を吐き出した。

「いやいや、千冬さんの怪我がすぐ良くなるようにって祈っただけですよ」

刀を持っていたならその首をはね飛ばしたいな。

事実上二対一の戦いだと思っただが

学年別トーナメントが始まったんだな。

コーヒー片手にしみじみと思う。

今日までとても、とても大変だった。

右手を負傷したのを知った山田先生が泣きながら私に抱きついてきたのだ。

曰く、私1人ではあの仕事量と十六夜を相手にするなんて出来ませんと。

気にすることは無い。私も無理だから。

異常に取り乱した山田先生を鎮めるのには苦勞した。何せ、知らぬ間に十六夜が山田先生を連れ回して部活見学に行っていたのだからその時の疲労や鬱憤が私の怪我を見て溢れ出したみたいだ。

私は何度も山田先生に謝り、出来る限りのサポートに徹した。他の先生方に頭をさげて手伝ってもらいもした。初めて人望があったことに感謝をしたのだ。何があるかは分からないな、人生。

「一回戦は織斑くんとデユノアくんペア対ボーデヴィツヒさんと篠ノ之さんペアですね」

私の隣で山田先生が嬉しそうに語る。

別に山田先生は自分のクラスの生徒同士が戦う事を嬉しく思っているわけでは無い。私の右手の怪我が完治した事を嬉しがっているらしい。

それにしても。

「どうにも作為的なモノを感じてしまうな」

因縁のある一夏とラウラが初戦で戦う。裏で誰かが操作しているように思えてならない。考え過ぎか？

「大丈夫ですよ、千冬さん、真耶ちゃん。例え仕組まれたモノであっても、俺がなんとかしてみせますから」

何故か私達と一緒にの空間に存在する十六夜がキリツとした顔で宣言してくる。

仕事もしないくせにか？

初日から今の今までろくな事をしてない十六夜に一度も期待してないから、気張るな。とても迷惑だ。

もはや応えるのも億劫なのでアリーナの方へと目を向ける。

アリーナ内では4人の内3人が睨みあっていた。ラウラと箒は一夏を睨み付け、一夏はラウラだけを見ていた。おそらく、ラウラ以外には見えていないだろう。

試合開始と共に私の見立てが当たった事が分かる。

箒は一直線に一夏に向かっていく。口が動いているから、一夏に対して何かを言っているのだろうな。

ただし、一夏には箒は見えていない。いや、見えてはいるが相手に

してない。

一夏は飛び出し、箒の脇を通りすぎる。通り過ぎざまに雪片式型でダメージを与えていった。

一夏とつばぜり合いになることを予想していたのか、箒は間の抜けた顔をしていた。

戦場で止まるな。

私がコーヒーに口をつけながら見てみると、動きを止めてしまった箒をデュノアが狙い撃つ。

「……違う？」

その光景を驚きながら見ている十六夜。

何が違うのだ？間違いでもあったのか、自分の予想に？私としては一夏のやり方は良かったと思うが。

迫り来る一夏にラウラは右手を突き出す。ただそれだけで一夏の突撃を止めてしまう。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。略してAIC。日本語で言えば慣性停止能力。どんな力かと言えば、動きを止める。

ラウラは身動きが取れず的になった一夏に肩のレールカノンを構える。

一対一ならラウラ、お前の勝ちだろう。しかし、軍人にあるまじき

見落としがあるな。

一夏の背後からデュノアが現れ、ラウラに弾丸を撃ち出す。

デュノアの攻撃がレールカノンを逸らし、またA I Cから一夏を解放する。

デュノアの射撃に距離をとることを余儀なくされたラウラ。一夏が食らいつくように間合いを詰める。

2人の間に割り込む箒。一夏にブレードを振りおろす。

箒の奇襲に近い攻撃を一夏は体をずらして回避する。すると一夏の体で見えなかったデュノアが箒の前に現れる。

箒が反応するよりも速くデュノアが弾丸の雨を浴びせる。

もの凄い勢いでシールドエネルギーを削られていく箒は急いで回避行動をとるが一定の距離感を維持したデュノアの前に敗北した。

一夏とラウラの戦い一瞬の戸惑いや慢心が敗北に繋がるものであった。

ラウラの振るうプラズマ手刀を右の雪片式型と無手の左で受け、または払う。別の角度から襲いかかるワイヤーブレードは両足で蹴って弾く。並みの集中力ではもたない戦い方だ。

一夏の方が押されているが、ラウラが焦っているのが分かる。苦も無く勝てると踏んでいたのだろう。

ラウラは急いで両手を突き出してA I Cを発動させる。

一夏を止める事に成功したラウラは自らの勝ちを悟ったのか顔から焦りが消えた。

馬鹿者が。この戦いは一夏とお前だけの舞台ではない。

デュノアがラウラの真上から弾丸を降らせてつつ、急降下してラウラの後ろを取る。

デュノアの盾の一部が外れ、パイルバンカーが姿を現す。それをラウラの背中へと突き刺す。

同時にA I Cの拘束逃れた一夏が零落白夜を発動させる。

決まったな。

ラウラの敗因は慢心。

「何でこんなに違うのさ？」

1人頭を抱える十六夜がいた。

山田先生が本気でひいているのだが……まあ良い。

私がアリーナに視線を戻すと異変が起きた。

主役は遅れてやってくるのさboy十六夜

今アリーナに響いているのはラウラの絶叫。

苦しみ

悲しみ

渴望

たぶんこれらが今のラウラの心を占めているだろう。
かわいそうだ。だが、安心して良い。

「シャルル、箒、一夏は俺が助けますから」

アリーナで起こったラウラのイベントに驚いている真耶を安心させるように肩に手を置く。

真耶は小刻みに体を震わせ、顔には恐怖が貼り付いている。
そんな顔をした真耶が俺を見上げてくる。

やっばいな。完全に俺に期待してるな。これは頑張ってラウラを救出しなきゃいけないな。

活躍に真耶。救出にラウラが俺の虜になるな、絶対に。
おっと、千冬を忘れた訳じゃない。

会場内に非常事態発令を発している千冬の後ろ姿を見る。

……後ろ姿でも良い体だと分かる。

「千冬さん、真耶ちゃん、」

俺が名前を呼ぶと2人共振り向いてくれる。

「行つてきます」

背中を向けて走り出す。

あれ、めちゃくちゃ格好良いんじゃないの俺？

アリーナ内にたどり着くと、一夏がラウラだった黒いISと剣を打ち合っていた。

一夏と黒いISの距離が開くとシャルのマシガンが火を吹く。

……おかしい。確かシャルは一夏なんかエネルギーを渡して戦えない状態はず。

「意志を否定して、不細工な真似事まで。そんなに千冬姉を侮辱したいのか!!」

怒りこもった咆哮と共に一夏が雪片式型を黒いISに振るう。

「一夏、あまり無理しないで」

後方から一夏を援護するシャル。

まてまてまて。これが俺の介入の結果なら、必ず出番があるはず。この状況はその為のふせんだな。なら、この戦いに介入する。

黒印を展開して、ラウラの元へと向かう。

「みんな、無事ですか!!」

みんなって言うか箒とシャル。一夏？千冬のフラグの為なら心配してやるけど。

「離れろ!!」

射線に黒いISを捉え、右手に構えたビーム砲『黒龍』を発射する。

太い閃光が黒いISまで伸びるが回避される。

もう一発と黒いISに狙いを定めるが、射線上に一夏がしゃしゃり
でる。

「馬鹿!!一夏、退け!!」

俺がいるのになんで前に出てくるんだよ。

俺は急上昇して黒いISの頭上に陣取る。

「ラウラ、お前を救う為だから大人しく当たれ」

上から黒龍を放つ。

黒いISが避けるものだから、何度も黒龍を放つ。何度も何度も。

不意にISから警告音が聞こえる。

俺が警告音に気づいた瞬間、謎の衝撃によって体勢が大きく崩れる。

体勢を崩してしまった俺に一夏はチャンスとばかりに黒いISに突撃する。

黒いISの刀を弾き、一夏は縦に雪片式型を構える。

主役はお前じゃないんだよ、一夏!!

体勢を素早く直して、黒龍を黒いISに放つ。

黒龍が黒いISにたどり着くよりも一夏の攻撃の方が速く黒いISを切り裂いた。黒龍のビームは悲しく何も無い空を切り裂いて、地面に消えていっただけだった。

周りは気持ち悪がります 前（前書き）

遅れましたね。欲張って二話投稿。
視点は山田先生。

では、どうぞ。

周りは気持ち悪がります 前

何があったのか？

どうして起きたのか？

アリーナ内で突如として絶叫するボーデヴィツヒさん。シュヴァルツェア・レーゲンがドロリと溶けてボーデヴィツヒさんを包み込んでしまいました。

そして、現れたのはシュヴァルツェア・レーゲンとは違う黒いフルフェイスのIS。

私たちがいる空間の中で誰よりも速く動いたのは織斑先生でした。織斑先生は会場内の避難と教師部隊の突入を指示し始めました。

うつ、カッコいいです。

私のがんきにそう思っていると不意に、肩に誰かの手が置かれました。

……ぞぞぞっ！？

悪寒が身体中を駆け巡って震えてしまいました。恐る恐る肩に手を置いた人物を見上げる。

十六夜時雨先生だ！！

初めて見た時はカッコいいと思いましたが、わずか1時間で気持ち悪いと心の底から思いなりました。正直に言えば先生と言ったのが

辛いです。仕事に誇りも責任も持たない人を同じ先生と呼ぶのは織斑先生や語奈先生を汚してしまう気がするから。以前、石狩先生が言っていました。

適切な処置、具体的に言うと暴力と呼ばれる行為でギタギタにしたって。

私にもそれだけの力があつたらやりたいです!!

私を見下ろす顔が気持ち悪すぎて恐すぎです。

織斑先生。出来れば早急に此方に向いてください!!

「千冬さん、真耶ちゃん」

呼び声に反応して織斑先生が振り向く。その顔は無表情で目だけが怒りに近い感情を宿していました。

私よりも下の人なのに勝手に下の名前を呼んでくる。他の先生方が彼を嫌う理由の1つ。

社会に必ずある上下を無視した態度。

あの日、織斑先生が叱りつけたのにまったく反省していません。

「行つてきます」

肩の不快感が無くなると後ろから足音が聞こえ、遠退いていった。

「……織斑先生」

「……ん？何かな、山田先生？」

「行ってきますって何でしょうか？」

「はあ。知らん。だが、そのまま消えてもらえると助かるんだがな」

いつの間にか当たり前になっているため息をついた織斑先生はコーヒーに口をつける。

「山田先生もどうだ」

「いただきます」

久しぶりに2人きりの休息でした。

……はふう。

今は非常事態なんですよね？

周りは冷やかな 後（前書き）

視点はオリキャラの語^{かた}奈先生。

では、ちうにどつぞ。

周りは冷やかな後

織斑先生のアナウンスが私たちの元へと聴こえてきましたわ。

会場内の至るところで待機していた私を含む教師の皆さんが事態を理解して走りだします。

アリーナに目を向ければ、織斑先生が受け持つ一年一組の生徒、ラウラ・ボーデヴィツヒが悲鳴をあげています。

ISが崩れ、彼女を包み込んで新たなISを形成するのを見てしまいました。

これは、間違いなく異常事態ね。

急いでピットへと向かおうと走りだします。

途中で石狩先生と合流しました。

石狩先生は相変わらずの無表情でしたが、彼女が焦っているのが一目で分かるわ。

石狩先生は教師として、大人として生徒達を守ろうと必死になれる良い先生なの。

だからこそ、アリーナに突如乱入したお荷物さんに眼を鋭くしちやったわね。

「語奈先生。……私の目が正常なのか疑わしくなってきました。お荷物がアリーナに運び込まれてきたのですが」

「大丈夫よ、石狩先生。貴女の目はとても正常に働いているわ。私にもお荷物さんが見えるもの。私の目もおかしかったら分かりませんけどね」

でも先生の皆さんも目を丸くして見てるわね。あまりに不相応な助っ人に。

私と石狩先生は顔を合わせると全力で走り出した。

ピットへとたどり着くと私はラファール・リヴァイヴを、石狩先生は打鉄をそれぞれ纏う。

「聞こえるか？」

先生の皆さんしか居ないピット内に織斑先生の通信が届く。

「此方、語奈。どうぞ」

この場を代表して私が応えますね。

「あのお荷物が場を乱して役に立たない。一時的にでも良いから止めてくれないか？」

焦っているのかいつもの喋り方に戻ってしまっている織斑先生。でも、そんなことを咎める先生の皆さんは此処にはいませんからね。誰かさんとは違い普段からちゃんと分別を持っている織斑先生だからよ。

「とりあえず、お荷物を攻撃すれば良いのですね？」

確認する石狩先生。

んー、それで良いと思うわ。

「確か、対ISライフルがあつたはずです」

石狩先生がそう言うとなんかの先生が武器庫から二メートル位のライフルを持ってきて、私に渡してくれたわね。

私が皆さんの顔を見ると、誰もがぶっぱなしてくれと言っている。
なら

ピットから少しだけ出て

ライフルを構える

黒いISの上でビームを撒き散らす

ISを

「狙い撃つわー!!」

躊躇いなど微塵も無く、引き金を引く。

事件が終わっても騒動は止まないな

私は唯待っている。待ち続けている。

ベッドの上で静かに眠る銀色の少女が起きることを。

ラウラは私の表面しか見ていなかった。

……いや、見ようとしなかったのかもしれない。

元々は優秀であったラウラは大きな挫折を味わったらしい。そこに私が現れた。彼女を救った。

そこからだろう。ラウラが私に心酔したのは。

ラウラが私に何を見たのかは聞いてみなければ分からない。

ただ、私に対して一方的なイメージを押し付けようとしたのだな。

だから一夏を敵視した。ラウラにとって一夏は自分の抱く織斑千冬のイメージを壊してしまうから。

「はあ。私をもたらした歪みなのか」

誰も居ない保健室で私はため息をついた。

自分がラウラに植え付けたまま放って置いた過ちなのかもしれない。

目を閉じて待つ。ラウラが起きるまで。

「う、あ……」

どれくらい待ったのかは分からないが、小さく呻くのが聞こえてきた。

目を開けて音の発信源を見ると、ラウラが目を開けていた。状況が理解出来ないのだろう。色違いの瞳が動いていない。

「気がついたか」

私の声にラウラは首だけを動かして私を視界に納める。

「私……は？」

無駄だとは思うがはぐらかすか。

「無理な負担が全身にかかったことでの筋肉疲労と打撲だ。しばらくは動けないだろうから無理をするな」

「何が……起きたのですか？」

痛みを我慢しながら上半身だけを起こすラウラ。瞳は此方に向いていた。

「はあ。一応、重要案件である上に機密事項なのだが」

つまりは他言無用。だが引き下がないだろうから、何があったかは伝えるべきだな。

「VTシステムを知っているな？IS条約で研究・開発・使用の全てが禁止されている」

「はい……」

皆まで言う必要はないかも知れない。

「お前のISに積まれていた。巧妙に隠されていたよ」

うつむくラウラ。

「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、操縦者の願望が揃うと発動するようになっていた」

「……私が……望んだからですね」

織斑千冬になることを。

そうだ。だから私にも責任があるな。お前に幻想など抱かせてしまった。

私になることを望んだラウラはきっと自分を見失っているな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

ラウラの名前を呼ぶ。

「は、はい!？」

何故少しだけ分かっていない。

「お前は誰だ？」

一見すると変な問いかけだな。名前も顔も知っている相手にこんな事を言うのは。

「わ、私は……私は……」

名前を言うことが出来ないラウラ。

「誰でもないのか？ならば、お前はラウラ・ボーデヴィツヒになるが良い。幸いにも時間はたっぷりある。まあ、悩みながらもゆくりと生きてみる」

私がこんな事を言うのが意外だったのか、あからさまに驚いているラウラ。

軽くへこむぞ。

さて、ラウラも起きたことだ。私も仕事に戻ることにしよう。長い時間十六夜の足止めしてしてくれる山田先生の為にも。

翌日、私は絶望しきつた山田先生の肩を確かに叩いて一年一組まで送り出す。

絶望の原因である金髪の少女と十六夜を従えて山田先生はフラフラと旅立つ。

突然、シャルル・デュノア改めシャルロット・デュノアが女性であると宣言されて山田先生の精神は崩壊寸前だ。

途中で倒れないか心配だな。

自分のデスクでしばらくゆるりしていると、一年一組の女子生徒一名が教務室へと駆け込んできた。

「織斑先生！！一、二組の専用機持ちが暴れています！！」

……は？

語奈先生や他の先生達が同情するような視線を向けてくる。

「朝からアイツ等は」

女子生徒を置き去りにして全力で走りだす。

私の安らぎの時間を取るんじゃない！！

早く1日が終われ！！

……頭が痛い。

朝から頭痛がするなんて。別に二日酔いでもないのだが。

何故頭が痛いのか？たぶん……いや、確実にラウラが原因の一端を担っているだろう。

ラウラが丸くなってから少しして、一夏が助けを求めてきた。

曰く、入浴中に侵入してくる。

曰く、ISスーツを着ている時に侵入してくる。

心底嫌がっているのか、侵入と言う単語を使っていたな。何故あんなことをするのかを聞いたらしい。

返ってきた答えは「一夏に倒される為」だそうだ。

意味が分からない。

さて、実は今日山田先生が居ない。

来週からある校外特別実習、言い方を変えるなら臨海学校がある。

その現地視察の為に山田先生は休みだ。

これは大変な事態だ。

何が大変かと言えば、十六夜の鬱陶しさを1人で堪えなければならぬからだ。

遺書か何かを書いておくべきか？とりあえず一夏に宛てて。

冗談はさておき、少々早い教室へと向かうか。

自身のデスクからゆるりと音をたてず離れる。

ちらりと教務室のある場所を見る。

そこでは十六夜が語奈先生に話しかけていた。

不思議だな。奴のデスクには何かを準備した形跡がない。いつものことだが。

私は十六夜に気づかれないように教務室を出る。

勝手ながら、語奈先生ありがとうございます。

いつもより早く教室に着くと、生徒達が此方を見ながら固まってしまった。

「はあ。まだ時間じゃないから安心しろ」

私がそう言つと、再起動する生徒達。皆てきぱきと動き席に座る。

さて、誰が居ない？

教室内を見渡す。

まず、一夏が居ない。ラウラと筈、デュノアか。オルコットは……居る！？

一夏にまとわりついているメンバーの中で唯一オルコットだけが居ることに驚いていると、ISを展開した馬鹿とおそらく無理矢理引っ張られてきた一夏が現れる。

「到着！！」

1人上機嫌でいるデュノアと言う馬鹿。

「1人苦勞」

私の声にデュノアはゆっくりと此方を向く。

私の存在を確認したのか、みるみる青ざめていく。

「言わなくても分かるな？」

右手に持った出席簿を振り上げる。

バアン！！

「は、はい。すみません」

「デュノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。二回目はもっと酷いからな」

残念ながら一夏、止めなかったお前も共犯だ。別にお前が毎日のようにラウラのことで訪ねてくるのにイラッとしたわけじゃない。

「まあまあ、2人に悪気があった訳じゃないんですから。許してあげなよ、千冬先生」

教室に入ってくる十六夜。もう終わった話なのに何を言っているのだ？

チャイムが鳴り響き、SHRの開始を知らせる。

ああ、早く1日が終わらないものか。

長い電話は注意だな（前書き）

変な感じに仕上がりました。

長い電話は注意だな

「もすもす？ひねもす？」

——ピッ！！ツーツーッ。

とある夜のことであった。なんとなく友人に電話をかけたのだが間違ひ電話をしてしまったらしい。

「よし、明日に備えて寝るか」

IS学園にある自室で私は自分に言い聞かせるように声を出す。

明日も早いからな。

来週の臨海学校に浮かっている生徒達を相手にしなければならぬ。

ぴりりりり！！

眠ろうとしたら携帯電話が鳴り出した。

まったくこんな時間だと思いつつ、携帯を手取る。

「はい、貴女のアイドルで婚約者、篠ノ之束此処に見参！！世界は私の遊び場だから」

やかましい音が携帯から聞こえてくる。

「すまない。激しくかけ間違いだ」

「何がかな？ボタン？」

「確かにそれもかけ間違えているな」

「私とちーちゃんの関係は間違っていないから大丈夫!!」

自信たっぷりに宣言してくる篠ノ之束。

「まあ良い。で、なんの用だ？」

「あれ？最初に電話してきたのはちーちゃんだよね」

そうだったか？気にしないことにしようか。

「で、何の用かな？楽しいこと？それとも私に愛の告白？」

「別に用はない」

確かに私はなんで電話をしたんだ？暇だったからか？

「じゃあ、私の声が聞きたくなったとか？」

「——そうかもな」

気づいたらそう言っていた。

「嬉しいな、ちーちゃん。天才束さんはキョんキョんしてきたよ」
電話の向こう側がさらにやかましくなる。さらに何かを倒した音もしている。

久し振りに束の声を聞いたが、違和感がある。その正体は分からない。

「何かあったのか？」

ピタッとやかましかった束が沈黙する。

——明らかに何かあったな。

「……変な事があったんだ」

「変な事？」

「確か、ちーちゃんの所に十六夜とかなんとか言うのが居たよね」

「ああ」

「それが急に私の所に来たんだよ」

束の声が少しだけ震えていた。

「どうして？どうやって？私とちーちゃんしか入ってはいけない場所に来たのか分からないだよ」

深呼吸した。

「初めてそれを見た瞬間にISを造らなければならなかったんだよ。思わされたの間違いかな？私の頭の中を支配されたんだ。ISを造り終わった後に気がついたんだけど。」

とても不快だったよ。造った事を覚えていたのに、なんでISを造ったのか理由が分からないんだから。なんで？ねえ、なんで？」

「……………」

「なんでなんでなんでなんでなんでなんで?」

「落ち着け、束」

「ねえ、ちーちゃんに会いたいよ」

心の底から込み上げてきた声に私は黙る。

しばらくしてから私は口を開く。

「来週に校外特別実習がある。その時に会おう」

部外者が来ては行けないが、ISに関して一番の関係者なので構わないだろう。

その後は他愛ない話をしてから電話を切った。

長く話したらしく、時間を確認すると午前2時だった。

「少々厳しいな」

次の日、私は睡魔と戦い続ける羽目になった。

一夏が素早い件について（前書き）

前回出来なかったので二話同時に投稿。

内容は……軽く雑かも知れません。

一夏が素早い件について

今日は日曜日。

週末と言われているが私としては週の始めだ。カレンダーなどでも一番左が日曜日なのだから。

私の認識だと約束の時に大変な間違いが起こる。土曜日に「来週の日曜日にどこどこで会おう」と約束したら私は明日の日曜日と考えてしまう。

「織斑先生、何にしますか？」

水着片手に問いかけてくる山田先生。

私と山田先生は『レゾナンス』と呼ばれるショッピングモールの二階、水着売り場にいる。

「どれでも良い。変な物でなければ」

正直に言えば乗り気でない。今日はゆるりとしていたいから。別段、水着にそこまでどうこう求めているない。

「あの、試着しますから感想をくださいね」

近くにある試着室へ向かう山田先生。

1日目は少しだけ自由があるからはしゃいでいるな。

「分かったから、そうはしゃぐな」

ウキウキとした足取りで試着室に向かう山田先生についていく。

山田先生が試着室の前に立つとドアが開いた。

「……え？」

「……え！？」

「……ええ！？」

山田先生が固まった。

ドアを開けた人物とその人物の後ろにいた人物も固まった。

「はあ。何をしてるんだ？」

一夏とデュノアと一緒に試着室に入っている事に山田先生はパニックに陥ってしまい、店の中だというのに悲鳴をあげる。

「はあ、水着を買いに。でも、試着室に2人で入るのは感心しませんよ。教育的にもです」

店内で叫ぶのも良くないぞ、山田先生。

必死に2人を叱りつける山田先生の後ろで私は水着を物色中。
ところで、先ほどから見覚えのある不審者が視界に映るのだが？

「そろそろ出てきた方が良くないか？」

どうやら一夏も気づいたらしい。たぶんデュノアも気づいているだろう。奴等のお粗末なストーカー行為に。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

ならばとつと出てこい。

「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

鈴音とオルコットが仲良く登場してきた。

「女子には男子に知られたくない買い物があんの!!」

「そうですね!! まったく、一夏さんのデリカシーのなさにはいつもながら呆れてしまいますわね」

私はお前等の素晴らしい考え方に呆れてしまうな。

「もうこれで良いから買って帰ろうか」

ぼそつと呟く私はきつとだいぶ疲れているだろう。

「!?! や、山田先生!! 何か買い忘れた物があるんじゃないですか!! 場所も分からないだろうからセシリアと鈴。あとシャルを連れていってください!!」

何故か慌てて山田先生、オルコット、デュノア、鈴音を追い出す一夏。

買い忘れた物が分からなければ場所も分らないんじゃないか？

気がつけばこの場には私と一夏しかいなかった。

「あーっと、一夏？」

「千冬姉、この黒いのはどうだ？」

いつの間にか黒い水着を持っていた一夏が私に尋ねてくる。

——どう言葉に表せば良いか分からないが……とりあえず速いな。

臨海学校1日目の話だ

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

臨海学校初日。

「「「よろしくおねがいします」「」」

バスから降りてきた生徒達は女将の清洲さんに挨拶をする。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」
毎年笑顔を絶やさない挨拶。

私にはまったくと言って良いほどに無理だな。特に最近は。

挨拶をしながら生徒達の顔を眺めていた女将が一夏に目を止める。

「あら、此方が噂の」

「ええ。今年は男性が2人いるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

去年までならあちらもスムーズにやれただろう。しかし、今年は一夏と十六夜がいるせいで忙しくしてしまった。

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子達じゃありませんか。」

そのいい男の子達の中には当日になるまで教師陣が要らないんじゃないかと議論に発展した人物が混じっているのだが。

「しっかりしてそうな感じを受けますよ」

女将の言葉に思わず十六夜の方を振り向いてしまいそうになった。

「感じがするだけです」

約一名は感じすらないんだが。

「挨拶しろ」

一夏の肩を叩いて挨拶を促す。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

「十六夜時雨です」

別にお前に挨拶を求めている。

「ご丁寧にも。清洲景子です」

再度丁寧な挨拶をする女将。

一夏が少し緊張しているのが伝わってくる。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな」

生徒達は元気な返事をする、すぐさま荷物を持って旅館へと向かっていった。

「織斑、お前の部屋は此方だ。ついてこい」

私は自分の荷物を持って旅館の中へと入る。
後ろからついてくる足音が2人分。

…… 2人分？

教員室と書かれた紙が張られたドアの前まできたので、勝手についてきた人物を確認する。

「はあ。お前の部屋は此处ではない、十六夜先生」

ついてきた人物が十六夜であることに思わずため息が出てしまう。

「いやいや、一夏くんを引き取りにですよ」

うざったいほどの笑顔でそんな事を言ってくる十六夜。

一夏が凄い形相で十六夜を睨み付けている。

「これはすでに決まっている事だ。今さら覆す必要はない」

「兄弟とは言え、同じ部屋で居るのはどうかと思いますよ、千冬先生。何かあったらヤバイですよ。それなら一夏くんは俺と一緒にの方が良いですよ」

何かあったら……。お前の一夏に対する評価が少し分かった気

がするよ。不本意ながら。

「お前の部屋は一人部屋だ。言っておくが部屋を替えることは認められん。生徒や先生方に通達しなければならないからな。それに、お前が訪ねてくる女子生徒に対する抑止力になるとは思えない。分かったら自分の部屋に行け」

一夏を部屋に入れて十六夜に消えるように言うと、十六夜は解せない顔で消えていった。

「おお、すげー」

部屋の中から一夏の声が聞こえてきたので私も部屋の中に入る。一応の注意事項を一夏に告げておく。

「今日は1日自由時間だ。荷物も置いたことだ、遊んでこい」

「えっと、織斑先生は？」

「やることをやったらゆるりとするさ」

今はやらなければならない事があるからな。

コンコン。

「織斑先生、ちょっとよろしいですか？」

ほら来た、山田先生だ。

「どつぞ」

私が許すと山田先生が書類を目にしながら入ってくる。

書類から視線を外した山田先生は一夏を見て驚きの表情を浮かべる。

「わあつ、織斑くん。……そういえば織斑先生と同室でしたね」

一瞬度忘れたのかとおもったのだがな、山田先生。

「織斑、私達は仕事だ。遊びに行つてこい。ああ、それと。羽目を外し過ぎないようにな」

一夏にそう注意して山田先生と出ていく。

臨海学校1日目の夜だ

「ふむ、相変わらず良い湯だったな」

温泉から部屋までの道のりをゆるりと歩きながら独り言を呟く。

海の幸をふんだんに使った料理にゆるりと出来る温泉。臨海学校で私が楽しみにしている事だ。それがなければ行きたくないくらいに。

旅館が醸し出す落ち着いた雰囲気に浸りながら私は目的地へと向かう。

少々早いかも知れないが、このままの気分で寝てしまいたいな。

部屋にたどり着いて一番に視界に入るのはベッドではなく一夏だ。一夏は部屋に戻ったばかりらしく、何処にも腰を落ち着けずに突っ立っている。

「とりあえず座ったらどうだ？」

ベッドに腰をおろしてから一夏に言う。

「なあ、千冬姉」

「織斑先生と呼べ……と言いたところだが、今日は良いな。好きに呼べば良い」

「よし！ーじゃあ、2人きりだし、風呂上がりだし、久しぶりにマッサージでもしようか？千冬姉にはいつも迷惑をかけているからな」

腕の準備をしながら近づいてくる一夏に私は身を委ねた。

「千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？」

「否定はしないが……少しは加減をしてほしいな」

「はいはい。……んじゃあ、力の限りやらせてもらいます。……心が満たされるまで」

「加減してほしいと言ったんだが。……あと、最後になんて言う……くぁ！！そこは……」

「すぐに良くなるって。だいが溜まってたみたいだし。……ちなみに俺は千冬姉分がすっからかんで大変です」

「ほ、ホントに……最後なんて言う……あああっ！！」

疲れが溜まっていると痛いと言っるのは知っているが、いまだに一夏が何を言っているか分からない。

それよりも、先ほどから外でガタガタと音がするのだが。誰かが聞き耳をたてているようだな。

……。

………しばくか？

「じゃあ次は」

「一夏、少し待て」

「待たない!!」

人の台詞に被して否定するな。

私は無理矢理体を起こして立ち上がる。

まだマツサージの余韻が抜けてないからヨロヨロとした足取りでドアへと向かう。ドアの前まで来ると、おもいきり力を入れてドアを押し開く。

バン!!

「くくへぶつ!!」「く」

何か女子としてあるまじき声が響いた。

痛みに悶えて廊下を転がり回る筈、鈴音、オルコット。それを冷めた目で眺める一夏。

ドアを閉めた方が良いのか、この事態なら？

「はあ。何をしているんだ」

ため息をつくしかない事態だというのだけは分かる。

「は、はは……」

「こんばんは、織斑先生」

「さようなら、織斑先生!!」

背を向けて逃げ始める馬鹿3人。
もちろん逃がす訳にはいかないな。

オルコットの足を左足で引っかけ転ばず。

転ぶ訳にはいかないと無我夢中で手を伸ばしたオルコット。鈴音と
箒の浴衣の裾を掴んでしまい、2人も転んでしまう。

床に激突した3人はまたもや痛みにも悶え始めた。

「盗み聞きは感心しないな。まあ、ちょうどいいから入っていけ」

3人がピタリと止まる。

「それと、他の2人——ボーデヴィツヒとデュノアも呼んでこい」

仲間外れになったことに怒って一夏に被害がいたら大変だからな。

箒と鈴音が駆け足で2人を呼びにいくのを見ながら私は思った。

「おお、セシリア。何か用なのか？」

先ほどの冷めた視線はどこえやら。一夏はいつも通りに言っていた。

「え、いえ、ただ……その……」

まごついているオルコットを見て、何にも考えていないか、私がいる手前何も言えないのか。

そうこうしている内にデュノアとラウラを連れた2人が帰ってきた。

「一夏、私にマッサージしてくれて助かった。少し汗をかいただろう。風呂にでも入ってこい」

「分かった」

先ほどとは違い、一夏は私の言うこと素直に聞いて着替えを持って出ていった。

一夏が出ていった後、部屋は沈黙に支配された。

そんなに私がいるのが嫌か？

「とりあえず、飲み物でもどうだ？」

備え付けの冷蔵庫を開けて、適当に飲み物を投げ渡していく。

「好みが違えば各々で交換しろ」

「い、いただきます」

どうやら交換する必要はないようだな。

各々のタイミングで飲み物を口に含んでいく。

「いきなりだが……お前等はアイツのどこが良いんだ!？」

「くくくくぶっ!？」くくくく」

人の部屋で吹き出すな。

束の登場は嵐のようだな

臨海学校2日目。今日は丸1日ISの各種装備試験運用とデータ取りを行う。1日で終われるものだが、時間一杯使ってもぎりぎりだ。生徒達がてきぱき出来るかどうかにかかっている。

「それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。手早く行え」

手を打ち鳴らして開始を促す。

私の視界に一学年全員が映り込んでいる。その生徒達が一斉に動き出す。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに來い」

生徒の群れの中に箒を確認出来たので呼ぶ。

「はい」

群れの間を縫って箒がこちらにやってくる。

束の奴が電話でついでに箒のISを持って来ると言っていたからな。私に会いにくるのが目的で実の妹にISを渡すのがついでにとは。アイツらしいと言えばアイツらしい。

「お前には今日から専用——」

「会いたかったよ、ちーちゃん!!」

私の言葉を遮るように無駄に力のこもった声がIS試験用のピーチに響き渡る。

その場にいる全ての人間が止まり、声のした方へ向く。

一応此処は関係者以外立ち入り禁止なのだから、もう少し控え目に出て来れないのか？

視線の先には、勢いよく砂煙を上げながら近づいてくる篠ノ之束。

「抱き締めたいな、ちーちゃん!!」

アスリートの人間を越える走り幅跳びで私に飛びかかってくる束。

抱きしめようとするので体を横にずらして避ける。

結果、束は砂浜にダイブした。

「すまん」

表面上は謝っておく。私が避けたのが原因だからな。元々は束が飛びかからなければ良い話なのだが。

「うっ、ちーちゃんのその優しさが心に染み渡るよ」

ガバツと起き上がり小躍りする束。

あまりにテンションが高いな。

「やあ、篝ちゃん。久しぶりだね」

「……どうも」

テンションに差がある篠ノ之姉妹。

姉妹って似てないな。そもそも、箒はISをわがままを言って貰うのだから、もう少し態度に気を使ったらどうだ？

「えっと、この合宿では関係者以外は――」

「よせ、山田先生。束に自分こそが一番の関係者だと言われるだけだ」

「そ、そうですね……」

「さすが、ちーちゃん！！それでこそだよ」

私に向けて親指をグツとあげてウインクしてくる束。

本当にテンションが高いな。山田先生もどう対応して良いのか分からないくおろしているぞ。

まあ、久しぶりに会った友人が病的にげっそりしているよりは良い。

「束。せめて自己紹介くらいしたらどうだ。生徒が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才束さんだけど、私の名前を気安く呼んで良いのは昔からちーちゃんだけだから」

どんな自己紹介だ。しかも私を巻き込むんじゃない。

束の言動にちらりと作業しているであろう生徒達の方を見ると、皆啞然としている。

「一年、手が止まっているぞ。コイツは無視してテストを続ける」

「ちょっとちょっと酷いなあ。ちーちゃんに無視されたら、らぶりいな束さんは何かしらの要因で死んじゃうよ」

「何かしらとはなんだ？」

「んー、ちーちゃん分の不足？」

わざとらしくコテンと首を傾げる束。

何がちーちゃん分だ。私はお前の栄養か何か？

「ところでそこのおっぱい魔神は誰？……まさか、たぶらかしたなあ！ー！」

謎の自己完結で山田先生に飛びかかる束。

傍観していたいがほっとくとな事にならないので、仕方なく止めに入る。

「止めないか」

束の首に手をまわして山田先生から無理矢理引き剥がす。

拘束から逃れようと体をじたばたさせる束。しばらくするとピタリと動きを止めて力なく私に寄りかかる。

もしかして絞めすぎたのか？

「ちーちゃん位の大きさが一番だと思うなあ、私は」

何を言っているんだ？女性で大きさ……。この馬鹿は！ー！私は少しずつ束の首を絞める力を強くする。

「あれ？ちーちゃん、何だか呼吸し辛くなってきたよ」

「大変だな」

「ちーちゃんの胸の中で眠れるなら本望だよ」

なにやら不吉な言葉が聞こえたので、すぐに力を抜いて束を解放する。

「も、もう少しでちーちゃんの愛に溺れるところだった」

崩れ落ちるように座り混んで顔を赤く染めながら上目遣いに私を見てる束。

ある意味入り辛い雰囲気を作りだしてしまった私達に近づいてくる人物がいた。

ソイツはやたらと上機嫌な様子で束を見下ろす。

「久しぶりだね、束」

そう言つて手を差し伸べる十六夜。

「……何の用かな？ないならすぐに回れ右して海に飛び込んで藻屑になつてくれない。そもそも今は親友と言う言葉を遥かに凌駕するちーちゃんとの感動の再会なんだよ。訳の分からない部外者が土足で踏み入れないでよ。分かった？分からなくても良いからあっち行きなよ」

私と話していた時とはまったく違う冷たく、侮蔑した態度で十六夜を拒絶する束。

パツと立ち上がり私に抱きついてくる。

悪い意味で認識されているか。私が束についていなければならないようだな。

「ちーちゃんやわらかー」

……別についてなくても良いな。

知り合い同士は遠慮がないな

私の目の前に何か分からない金属の塊が砂浜に鎮座している。
見る人によつては不法投棄物にしか思えないだろうな。

銀色の不法投棄物の正面の壁（別にどこでも良いのだが）倒れて内包していた物を外気にさらす。

真紅に染まった装甲のIS。名前は分からないが束が箒に造りあげたIS。

私は箒の反応が少々気になったのでちらりと見る。
いつもと変わらぬ仏頂面であった。まるで興味がないと。

だが、内心は狂喜しているのだろうな。目が爛々としている。目は口ほどに物を言うとはこの事か……いや、違うか？

「じゃじゃーん！！なんとびっくり箒ちゃんの専用機。名前は『紅椿』。強いよ、速いよ、すごいよー！！」

途中で面倒になったな、束。

「全スペックが現行ISを上回る束さんお手製の1つだよ」

なんでもないように凄い問題発言を言つてのける束。

最新鋭にして最高性能機になるんだぞ。まったく、上にどう説明すれば良いのか？

それにしても、現行ISを上回るお手製の1つか。つまり、最高性能機が最低でももう一機あることになるな。

「さあ、箒ちゃん。今からフィッティングとパーソナライズを始め

ようか！！私が補佐するからすぐに終わるよん」

「……それでは、頼みます」

「……堅いよー。姉妹なんだから、こっもつとキャッチーな――」

「早く、はじめましょう」

箒は束の言葉を取り合わない。

「ん、そうだね。じゃあハジメヨウカ」

私は束の言葉に諦めの感情がこもっている気がした。一見すれば箒が束を突き放している様に見えるが、先ほどの束の言葉に私は束が箒を突き放した気がしてならない。

私が思考している間に束は箒のISのフィッティングを完了させていた。もちろん、箒は礼すら言わない。

嫌っているとはいえ、人に何かをしてもらったなら礼位言ったらどうなんだ。

「あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津々なのだよ」

束が一夏の方に向く。そして一夏は私の方に向く。

何故此方に向いた、一夏？

私が疑問に思っていると一夏が白式を展開させる。

束が白式の装甲にコードを刺すと空中にディスプレイが浮かぶ。

束がデータを見始める。

「そつえば、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「どうしてだろうね？ ナノ単位までいつく人を分解すれば分かる気がするけど、していいよね？」

「あつちの奴にすれば良いと思いますよ」

「あんなのを分解して空気中に混ざり込んだらどうするの？ 私はあんなの吸いたくないよ」

「ですよ。じゃあ、後付装備が出来ないのは？」

「私が設定したからだよ。欠陥機をもらっていじくりまわしたただだよ。おかげで第一形態から単一仕様能力が使えるでしょ？ まあ、日本がそういう風に関係したらしいよ」

何の悪びれもなく機密事項まで話した束に私は止めに入る。

「機密事項だぞ」

束の頭を軽く小突く。

「やあ、ちーちゃんとの触れ合いに私は満足だよ」

そう言つて私に飛び付こうとする束。ISを展開した一夏の腕に掴まれる。

「よっせええいいいっ！」

海に向かって投げ捨てられた。

はあ。何をしているんだ、一夏は。

「おおお、溺れる溺れるよ。誰か助けてほしいな。あえて言うならちーちゃんに助けてほしいな!!」

騒がしく溺れる束にとつとあがつて来いと思ったのは私だけじゃないはず。

「大丈夫ですか、束?」

束にボロクソ言われた後なのにISを展開した十六夜が束の救出に向かう。束は無表情になり、足に何かをつけたのだろう。いきなり海面を高速ホバー移動して今度こそ私に飛び付いた。

「……チッ」

「……ザマア」

舌打ちをする一夏とそれを嘲笑う束。

はあ。温泉と海の幸だけでは割に合わない気がしてきた。

1 + 1は2になるとは限らないな

「現状を説明する」

旅館にある宴会用の大座敷で私はそう切り出す。

照明を落としたので室内は薄暗く、何か起こったのが容易に分かる雰囲気だ。薄暗くしたのは空中ディスプレイを見やすくするだけなのだが。

それにしても体が重い。気が進まないのがダイレクトに出たのか？

「あの、織斑先生？」

恐る恐る山田先生が私に声をかけてくる。

「どうかしたのか？」

「背中に抱きついている篠ノ之博士はどうするんですか？」

山田先生の指摘に私は気がつく。背中に束が引っ付いていることに。

重い訳だよ。後ろから声も聞こえていたしな。ほっといたのは私が疲れていた証拠なのだろう。

「気にするな」

「えー。ちーちゃんのいけずー」

「二時間前にハワイ沖で試験稼働にあった——」

「無視されちゃった！？でも、そんなちーちゃんに私はぞくぞくメロメロなんだよ」

あー、なんだ？幻聴が聞こえているのか？

私が今回の非常事態を説明すると、集められた専用機持ち達が厳しき顔つきをしていた。

……一夏だけは私を射殺さんばかりに睨み付けていた。正確には私の後ろを。

ちゃんと説明を聞いているのか？

「我々がこの事態に対処することとなった。よって、作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい」

いの一番に手を挙げたのは一夏。

「とりあえず後ろの束さんを引き離すべきです」

うん。お前がマトモな事を言う訳ないと姉は信じていたぞ。不本意ながら。

面倒になってきた私は暴走したアメリカ・イスラエル共同開発IS

『銀の福音』のスペックデータを開示した。

後は一部を除く専用機持ち達が議論を交わす。

結果、一夏の零落白夜で倒す事に決まった。

「さて、この中で最高速度が出せる機体は？」

「それなら、強襲用高機動パッケージが送られて来てます」

オルコットが手をあげる。とても不安である。オルコットのISで対応出来るかどうか。一撃で決まるならオルコットでも構わないが、戦闘になった場合には辛いだろう。

「待った。その作戦に提案しちゃうよ！！」

耳元で急に大声だすなよ、束。

とう、と言う掛け声と共に私から離れる束。

やっと重さがなくなった。

まだ昼にもなっていない砂浜で私は一夏と箒がISを展開するのを眺めていた。

「じゃあ、箒。頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

機嫌良くそんな戯れ言を吐き散らす箒に私は嫌な予感がした。今回の人選は束の提案で箒を採用したが、正直私は反対だ。はつき

りと言おう。機体が良くても使い手がな。

「それにしても、たまたま私達がいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせれば出来ないことなどない。そうだろう？」

「……ソウダナ」

私の気のせいじゃなければまったく力が合わさった気がしないのだから。筈は自惚れているし、一夏なんて明後日の方を向いて生返事だ。

「ふふ、どうした？怖いのか？」

私は何処からくるかも分からないお前の自信が怖い。

「……ベツニ」

一夏は相変わらず生返事。

「はは、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる」

何処にだ？黄泉の国か？だとしたら心配だよ。

「大船に乗ったつもりでいればいいさ」

「……泥船の間違いだろ」

ボソッと一夏が訂正するが、上機嫌の筈は気がついていない。

私はゆるりと一夏に近づく。

「篠ノ之が馬鹿みたいに浮かれている。絶対に何か仕損じる。頼むぞ、一夏」

箒には期待しない事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8076w/>

知らない千冬がいる世界

2011年10月21日02時59分発行